

東大和の中世

—鎌倉幕府の終焉まで—

2007年上北台公民館

I 中世ってどんな時代？

一般的に日本歴史の時代の区分は

①飛鳥・奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国時代

②古代・中世

などと区別します。

①は政権の所在地によった区分であり、②は主に政治システムのあり方による区分としてつかわれています。

一方で、これらを組み合わせて

古代＝飛鳥・奈良・平安時代

中世＝鎌倉・南北朝・室町・戦国時代

とします。

この講座では、東大和市を含む多摩地域の実態から、ここで区分される平安時代末から鎌倉時代にかけてを中世の開始とし、戦国時代に至る間を中世とします。しかし、4回の講座で、その全てを辿ることは困難であり、今回は前半の部分である、中世の幕開けから、鎌倉幕府の終焉までを対象とします。

1 中世の幕開け（古代末、東大和周辺の景観）

東大和市は狭山丘陵の谷ツに生まれ、江戸時代に丘陵の前面に広がる武蔵野台地を新田開発して、畑作農業の村を形成しました。昭和10年代の日立航空機株式会社による南街の出現、昭和30年代の急速な住宅化を経て、現在では市域のほぼ全面が住宅で埋め尽くされた観があります。

しかし、中世の幕開けである古代末は、現在とは全く違った状態部分は、人の住まない地域であったと推定されます。

（1）古墳時代の武蔵野台地

3世紀中頃から7世紀前半までは「古墳時代」と呼ばれます。飛鳥時代と重なる時代で、武蔵野台地北部には埼玉古墳群が築かれ、多摩川や鶴見川周辺では有力な首長墳が築かれました。埼玉古墳群には辛亥年(471年)銘の刻まれた鉄剣を出土した稲荷山古墳が含まれ、多摩川流域では、渡来系の有力者の来住を示す狛江市の「亀塚古墳」や近畿政権と密接な関連を有すると考えられる世田谷区の「野毛大塚古墳」が存在します。

2003年に府中市で全国でも数少ない(現在のところ3基)上円下方墳(熊野神社古墳)が発掘されました。しかも、全国で最大であり、他とは違った武蔵地方特有の特徴を持ち、造られた年代は7世紀前半であることがわかってきました。

平安時代	・国府・国分寺創建 ・村山氏、山口氏などが定着
鎌倉時代	・頼朝が旗揚げ ・村山党が活動 ・鎌倉幕府 ・北条氏の時代
南北朝時代	・山口氏が足利氏と戦う
室町時代	・上杉氏や大石氏が活躍 ・山口氏が根古屋城を築城
戦国時代	・後北条氏が活躍 ・豊臣秀吉が八王子城を落城
江戸時代	・徳川家康が江戸幕府を開く ・直属の家臣が配属され、村ができる

長い間武蔵国府が何故、府中市につくられたのかが謎でしたが、この古墳が近畿政権に関連を持つ有力者の墓であることが想定され、その子孫が指導的役割を果たしたことが想定できるようになりました。

これに対し、狭山丘陵を含む東大和市域一带は大古墳が築かれず、巨大勢力が空白である、未開の武蔵野の原野が一面に続く地域でした。

その状況は大田区郷土博物館図録 武蔵国造の乱 p123 に手際よくまとめられています。右は 2004 年 5 月 26 日、熊野神社古墳の発掘状況を報道する朝日新聞記事。



(2) 武蔵野の原野を通る一本の道（東山道武蔵路）

7 世紀後半に入ると武蔵野の原野を貫くように、一本の官道がつくられます。群馬県から武蔵国府（府中市）への道でした。幅員 12 メートル、側溝付のほぼ直線の道路です。古墳時代の文化の交流、奈良時代の税である調、庸の運搬、官人たちの往来に利用されました。東山道は道路を意味するとともに、行政区域の名称でもあります。東山道に属する国は近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、陸奥、出羽の 8 カ国で、東山道武蔵路は上野国と下野国の間をぬって武蔵国・国府に連絡する道でした。（延喜式民部上）



道路の築造年代は、東村山市「東の上遺跡」の側溝から出土した須恵器と道路の硬化面の下にあった長頸壺によって、7 世紀第 3 四半期（650~675）と考えられています。そして、住居跡との切合関係から、8 世紀中ごろに、側溝が廃絶したとされます。

東山道武蔵路は宝亀 2(771)年に、廃止され、武蔵の官道は東海道に切り換えられました。但し、その後も継続して使われ、一部が鎌倉街道として生かされます。

白く光っている部分が中世の道になります。

狭山丘陵周辺と武蔵野台地に展開する奈良・平安時代遺跡の分布状況を示しながら、遺跡のない武蔵野の原野の中を東山道武蔵路がただ一本通る図が所沢市史上 p 247 にあります。

(3) 国府、国分寺の創建、武蔵国の誕生

武蔵の国府は現在の府中市に、国分寺は国分寺市に設けられました。現在、積極的に両市で発掘が行われ、その解明が進んでいます。その位置関係は国府が多摩川に近い府中崖線上の台地に、国分寺はその北側に位置する国分寺崖線に沿って造られました。

武蔵国府の設置については、「府中市の歴史」が次のように説明します。(府中市の歴史 p 99)

『武蔵国の国府は、府中の地に設置された。その中心官衙である国庁・国衙は、大國魂神社境内とその東側隣接地に所在したことが明らかとなっており、またこれを中心として広大な国府のマチが展開していたことも判明している。

大國魂神社境内とその東側に所在する国衙の諸施設は、今のところ八世紀第Ⅱ四半期頃に成立した可能性が高い。一方、これを取巻く国府のマチでは、七世紀末から八世紀初頭頃に竪穴建物が広範囲にわたって出現している。つまり、官衙施設よりマチの成立が先行するのである。

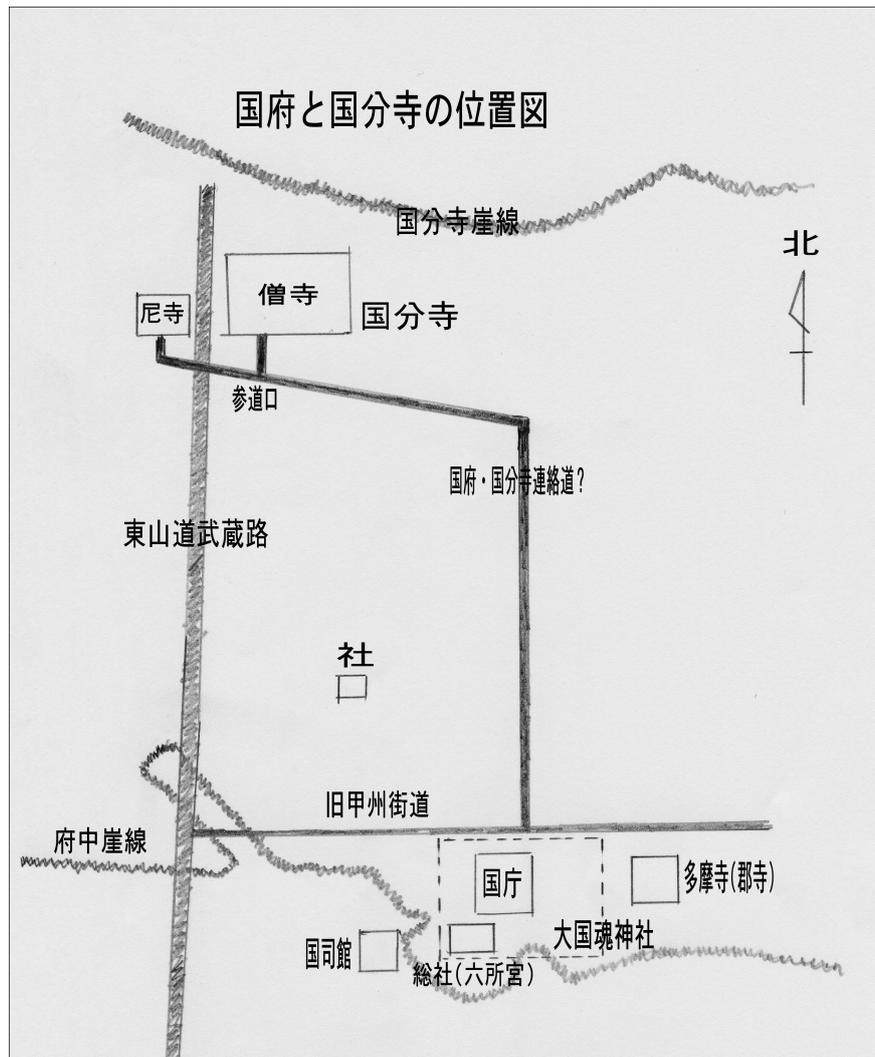
いったい、このマチは何を契機に成立したのだろうか。そして、国府の設置年代はどこに求められるのだろうか。この問題を考えるうえで避けられないのは、熊野神社古墳と、国衙の東に隣接する寺院跡の存在である。熊野神社古墳は七世紀中葉頃の築造と考えられていて、上円下方墳という墳形の特殊性が際立っている。しかし、墳丘の規模は八王子市北大谷古墳や多摩市稲荷塚古墳と同等で、埋葬施設である横穴式石室の規模と構造も、北大谷古墳や稲荷塚古墳に近似していて、多摩地域の首長墳のひとつとみるべきである。

国衙に隣接する寺院跡は、「多寺」や「磨寺」の文字瓦の出土から多磨寺と呼ばれた郡名寺院であることが確認されている。・・・その創建年代は出土瓦などから八世紀初頭頃に求められよう。

このように熊野神社古墳と多磨寺は、国庁・国衙成立前夜における多摩地域の中心勢力が府中を拠点にしていたことを推測させてくれるのである。熊野神社古墳の被葬者の後裔が多磨評の評督、そして郡司という律令官人に転進していった可能性は高く、その支配拠点である多磨評家や郡家もまた府中に所在したと考えることができよう。そうであるならば、多磨寺や多磨評家の建造こそ、マチの成立の契機であったのではないかと推測される。(一部省略)

以上のように、国府の成立は、わずかながらも国庁・国衙の成立に先行する七世紀末～八世紀初頭に求めることができると思う。』

大國魂神社には「くらやみ祭り」と呼ばれる六所宮の祭りが伝わります。これは総社の祭りで中世の伝承を色濃く残しています。一宮・小野神社、二宮・二宮神社、三宮・氷川神社、四宮・秩父神社、五宮・金鑽神社(かなさなじんじゃ)、六宮・杉山神社となっていますが、これらの神社は



ほとんどが古墳時代の豪族や武蔵国に置かれた「郡」とは関係がありません。中世の武士団に直結しています。府中の歴史は次のように説明しています。

『秩父氏・小野氏・日奉氏らは、いずれも秩父牧・小野牧・小川牧の勅旨牧を経営し、国衙領や荘園を開発しつつ、同時に国衙の在庁官人として政務を担ってきた。ここまできて気がつくのは、府中六所宮に祀られた六社のうち三つが彼らにかかわりの深い神社であることだ。秩父氏が奉祭する秩父神社(四宮)、小野氏の小野神社(一宮)、日奉氏の二宮神社(二宮)がそうである。三宮の氷川神社は足立郡司武蔵氏が祀っていた神社で、武蔵武芝が平将門の乱に巻き込まれて祭祀権を失って(『西角井系図』)からは、国衙が管理するところとなっていたのではなかろうか。金鑽神社(五宮)は武蔵七党の児玉党あるいは丹党と、橘樹郡・都筑郡の鶴見川流域に分布する杉山神社(六宮)の場合は、将門の乱鎮圧のため相模国押領使になった橘氏あるいは中世武士団の都筑党と関係するのだろうか。』(府中市の歴史 p 176)

後で、これらの背景を説明することになり、話が前後して恐縮ですが、ここに話題を入れておきます。

武蔵国分寺の創建については、国分寺市が次のように説明します。

『実質的には天平9年ごろから着手されたと考えられる国分寺の造営が、いつごろ完了したのかは武蔵国分寺を含め諸国とも明らかではありません。国分寺の造営事業は、国司の指揮・監督のもとに各国の財政事情に応じて進められましたので、天平12年の恭仁京(くに京=京都府加茂町)遷都から天平17年の平城京(奈良市)遷都に至るまでの中央政治の混乱や、造営費の不足と国司の怠慢などもあって、思うように進まなかったようです。

『続日本紀』によると、政府はこうした現状を打開するため、国司に対して造営事業の進行を督促する一方で、財政的配慮や郡司(地方豪族)層に対して造営事業への協力要請などの諸施策を行いました。天平神護2年(766)の修理を要する諸国の官舎の数の報告に国分二寺も含まれていることから、このころまでに諸国国分寺の多くが造営を完了していたと推察されます。



ところで、武蔵国分寺の創建年代に関しては、出土古瓦の検討によって次のような意見が出されています。

①天平宝字元年(757)とする意見

これは、国分寺出土の軒先瓦の文様が多種・多様であることを、聖武天皇の一周忌齋会を期限とする造営督促の詔(天平勝宝8年)を反映したのものと考え、齋会の行われた天平宝字元年ごろとする意見です。

②天平宝字2年とする意見

これは、武蔵国分寺より多く出土する郡・郷名瓦の中に、天平宝字2年に設置された新羅郡を表すものがないことで、これ以前とする意見です。

②の意見は、今日では通説化していますが、新羅郡設置時の構成員は、74人の半数以上を僧・

尼が占めるなど特異であり、郡の設置は藤原仲麻呂政権による新羅征討計画に伴う政治的な事情にあったと考えられます。さらに郡としての体裁を整えたのは天平宝字4～5年ごろと考えられることから、造営の諸負担について、他郡と同等に考えてよいのか疑問が残ります。

①の意見は、多種・多様の軒先瓦を根拠にしたことは誤りですが、平城宮で天平宝字年間に使用された瓦(図左)と、うり二つの瓦(図右)が出土すること、天平勝宝8年の造営督促の詔が出された直後に武蔵守を兼任した政府高官の高麗朝臣福信によって、平城宮系の瓦が導入されたと考えられること、などから妥当な意見と考えられます。

そして、高麗福信の任官から一周忌齋会まで1年足らずの期間であったことを考えると、齋会に必要な主要建物(金堂・講堂など)はこのときまでに完成したとしても、造営事業全体の完了は後数年を要したと思われる。』(武蔵国分寺のはなし P 22)



国分寺中門の発掘現場(2007年)

武蔵国の誕生

国の役所である国府が7世紀末から8世紀初頭にかけて成立し、国分寺が8世紀中頃完成していることを紹介しました。さて、「武蔵国」はいつ成立したのでしょうか？

平安時代初期に編纂された『国造本紀』によれば、武蔵国が成立する以前に、この地域には、土着の豪族である有力者の「知知夫国造」「牙邪志国造」「胸刺国造」の名があり、この国造と政府直轄の屯倉(みやけ)が混在していたようです。呼び方は、川崎市影向寺(ようごうじ)遺跡から出土した平瓦には「無射志国荏原評」とへら書きされた地名が記されています。これらからすると「ムザシ」と呼ばれたことが考えられます。

701(大宝元)年に、大宝律令が制定、施行され、地方制度(国郡制)も整ってきました。武蔵国には21郡が置かれたとされます。武蔵国分寺からは19の郡の名前が入った瓦が出土します。武蔵国分寺は天平宝字年間(757～765)に完成されたと考えられ、橘郡の瓦は影向寺に使われたことが考えられ、新羅郡(後の新座郡・にくら)は天平宝字2年(758)に新しく設置されていますから、それ以前には20郡全てが機能していたと推測できます。

現在使われる「武蔵国」は大宝律令が制定された以後のことで、和銅6年(713)に出された、『諸国の郡・郷名は二字で好字を用いよ』との詔を受けて、「武蔵」と漢字をあてて呼ばれるようになったのではなかろうかとされています。国立市の仮屋上遺跡の奈良時代の住居跡(時期的には、和銅6年の詔の頃)から「武蔵国多磨」と刻んだ紡錘車(直径4cm)が発見されていて、この頃から「武蔵」が使われたことがわかります。そして、名実共に「武蔵国」が成立したものと考えられます。

(4) 悲田処(多摩・入間の郡界)、天王守・森(野口の八坂神社)

東大和市周辺の9世紀を考えるのに絶好な資料があります。続日本後紀(しよくにほんこうき)天長10年(833)5月11日条で、読み下し文で紹介します。

『天長十年(八三三)五月丁酉(ていゆう=11日)、武蔵国言す。管内曠遠(こうえん)にして、行路難多く、公私の行旅、飢病の者衆(おお)し。よりて、多摩・入間両郡の界に悲田処をお

き、屋五宇を建てん。介従五位下当宗宿禰家主（あてむねのすくねやかぬし）以下、少目（しょうさかん）従七位上大丘秋主己（おおかのあきぬし）上の六箇の人、各公廩（くげ）を割き、以て糊口の資に備えん。すべからく帳に附して出挙（すいこ）し、その息利を以て充用すべし。相承受領して輪転断たざらんと。これを許す。』

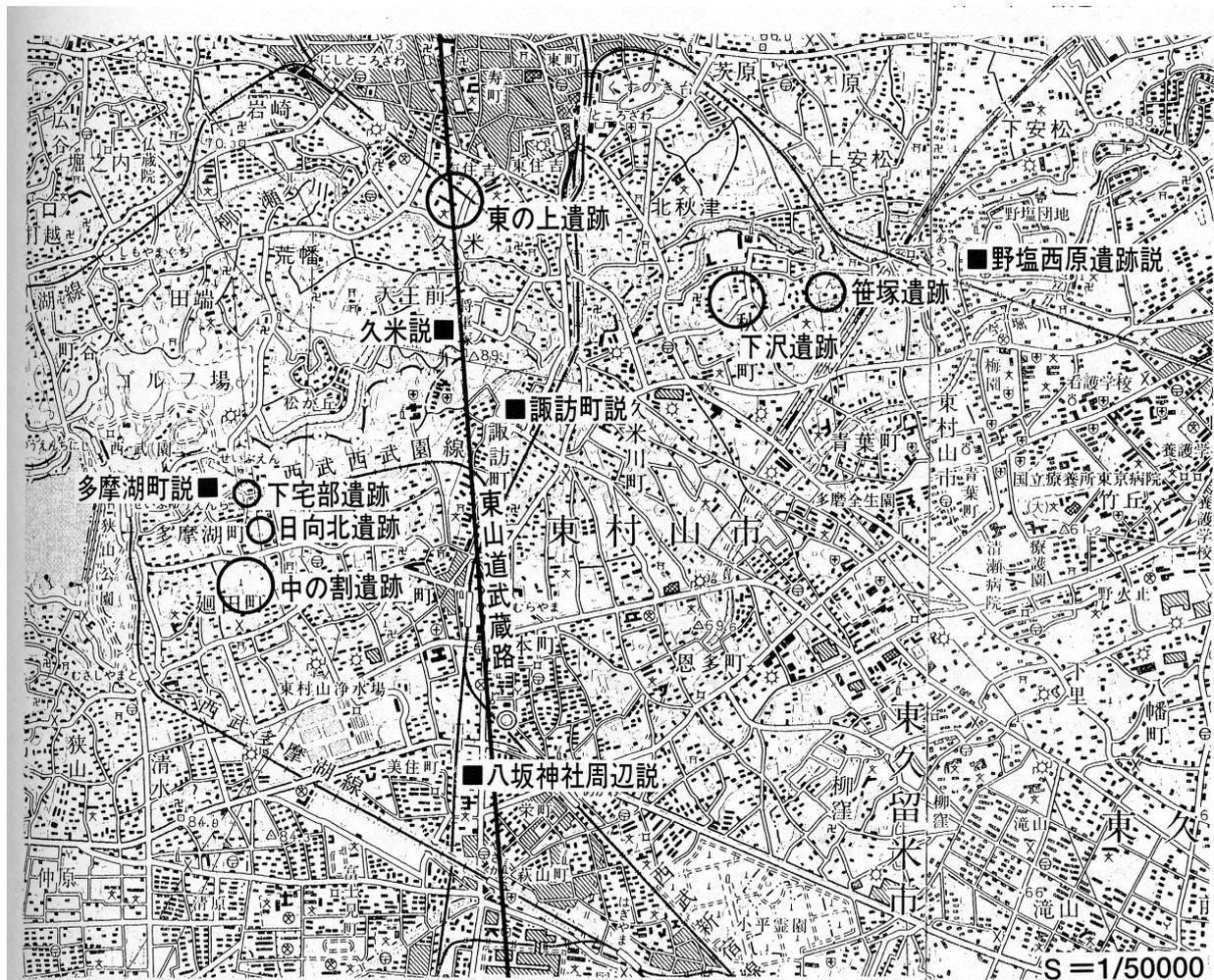


図530 悲田処推定地とおもな遺跡

東村山市史 5 資料編考古 p 763

図の通り、いくつかの候補地がありますが、問題は、多摩・入間の郡界がどこにあったかにかかっています。東村山市史編纂の過程で注目すべき提示がありました。現在の東村山市八坂神社付近を想定する考えです。

東村山市史資料編 考古は次のように主張します。

『これまで入間郡と多磨郡の郡境は、狭山丘陵と柳瀬川付近で漠然と画されてきたきらいがある。遺跡の分布により、その概念を少々修正しようと思う。「雑令」国内条に「山川藪沢の利は公私これを共にせよ」という規定があった。すなわち山野・河川は共有地域であるが、未開拓の山間部や原野は、空閑地として扱われていた。そうした空閑地が、暗黙の内に郡界の概念としてあったようである。そこで生産域を共有するような小河川や水源の豊富な丘陵の小支谷などで区分することは考えられない。

文献上において、758年の新羅郡設置の記事によると、新羅郡は、入間郡と豊島郡の間に置かれている。したがって、柳瀬川中下流域については、入間郡域に属していたことになる。つぎに多磨郡との境界であるが、空堀川は柳瀬川水系であり、空堀川は沖積地を形成せず、その流域にはこれ

までのところ集落の進出はみられていない。空堀川を渡河して国府方面の恋ヶ窪谷周辺域までには、8世紀から10世紀前半の集落の存在は、現在のところ皆無であること。また、そこは武蔵野の原野が広がる地域でもあること。したがって、当時の土地概念としては、共有地・空闲地に相当することから、空堀川以南が入間と多磨の郡界として解釈できるのである。狭山丘陵を含む柳瀬川水系の支流は生産性が高い地域で、遺跡の分布も濃い状況にあるため、入間郡域であったとすることが、極めて自然のように思われる。

とすれば、多磨と入間の両郡界に設置されたとされる悲田処の位置も、従来の所沢市久米、東村山市諏訪町、同市秋津町、同市多摩湖町、清瀬市野塩西原などの諸説とは別に、空堀川以南とする可能性も考えられる。その候補地の一つとして、東山道武蔵路推定ルート沿いにある八坂神社(旧天王社)付近をあげておきたい。疫病神である牛頭天王(素盞鳴命)を祭ることや「まいまいず井戸」の伝承も、その傍証になるものと思われる。』(p 699)

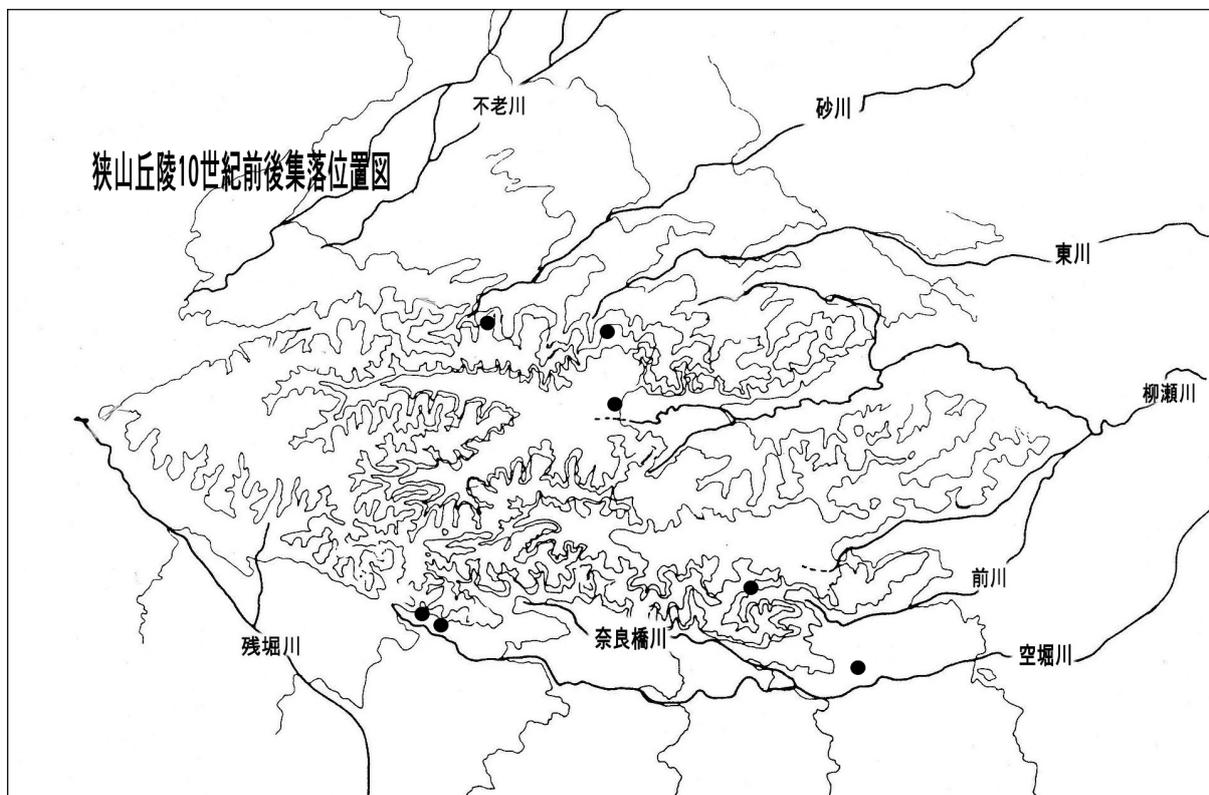
2 谷ツの開発

狭山丘陵周辺の古代から中世にかけての人々は、地形的制約から、丘陵に刻まれた谷ツからの湧き水をを利用して直まき水田と、ことによったら陸稲の栽培に、食糧確保の基盤を置いていたことが推定されます。

また、一方で、東山道武蔵路に接する部分に、「駅家」など一定の役割を持った集落が定着しつつあったことがわかります。

(1) 谷ツの集落

9世紀から10世紀になると狭山丘陵周辺では谷ツに小規模な集落が展開したことが想定されます。但し、集落として発掘されているものではなく、何軒かの竪穴住宅や遺物から想定されているものです。



(2) 東西3メートル、南北4メートルの家

10世紀前後の東大和市内の遺跡で住居跡が発見されているのは2箇所あります。廻田谷ツ遺跡と上ノ台遺跡です。

廻田谷ツ遺跡

1993(平成4)年、発掘調査 竪穴住居で東西3^{メートル}、南北4^{メートル}の長方形の住居跡2軒。東側の中央にカマドが作り付けられている。住居跡からは土師器と須恵器が出土、石器は出ませんでした。



平安時代末期の竪穴住居跡



平安時代末期の須恵器

東大和市史資料編3では次のように説明しています。

『近畿地方では貴族たちがきらびやかな生活をしていた同じころに、狭山丘陵の一角では、縄文時代からそう変わらない竪穴住居で生活していたことになる。発見された遺物からは、必要最小限の家財道具で暮らす姿が浮かび、決して豊かな生活を想像することはできない。』(p112)

後の時代には湧き水を集めた二つ池を灌漑用水とする「狭山田圃」が成立しますが、その最初の営みが始まったものと考えられます。

上ノ台遺跡

清水神社付近一帯に広範囲に広がる遺跡が上ノ台遺跡です。北に前川、南に空堀川があり、その中間にある台地に旧石器時代から奈良平安時代までの遺跡が複合してあります。ここから11世紀代と考えられる住居跡が発見されています。

東村山市史6 資料編・考古は次のように紹介しています。

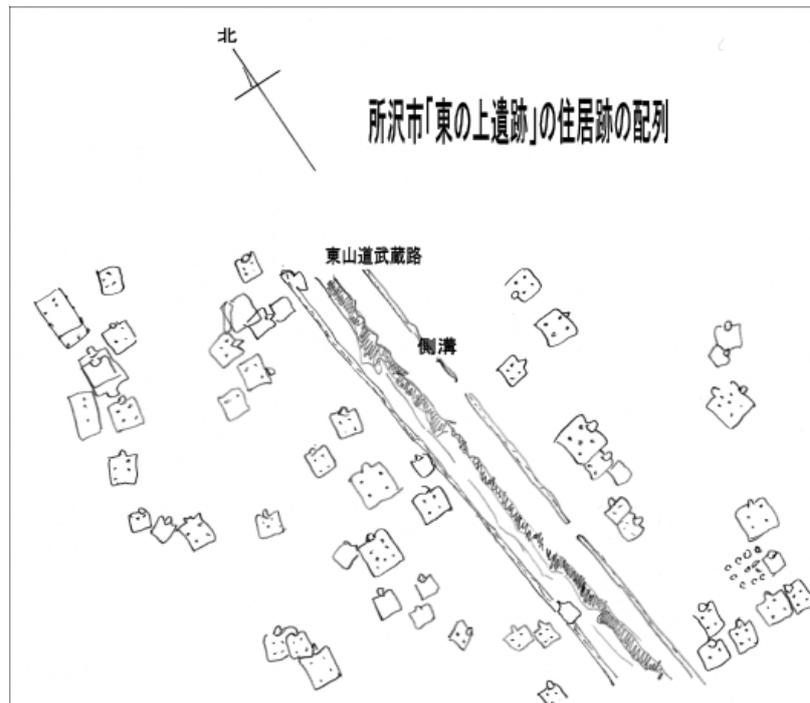
『上ノ台遺跡(東大和市清水2・3丁目)からは、竪穴建物跡1棟が検出されている(写真40)。遺跡は、空堀川沿いの武蔵野台地低台地に立地し、北側には前川が流れる。ここでみられる竪穴建物跡は、3.4m四方の掘り土間とその周辺1mの範囲が固く締まる床部分から構築されるものと考えられる。また、竈は、竪穴壁面に掘り込む形態ではなく、北壁中央やや西寄りの壁上に炉様のものが設けられていたようである。その竈脇からは、あたかもそこに置かれたかのように土師質土器の椀と坏が出土しており、棚状遺構の存在もうかがえる。11世紀代の年代が当てられる(図477)。空堀川上流には、そのほかに上砂遺跡(同市芋窪6丁目)が分布する。』(p688)

(3) 東山道武蔵路周辺の集落(東の上遺跡)

所沢市「東の上遺跡」では、東山道武蔵路沿いに多くの住居跡が発見されています。400軒近い住居跡が発掘されて、大規模な集落を形成していたことが知られます。8世紀前半から中葉、9世紀後半から10世紀前半の住居跡は存在しますが、8世紀後半から9世紀前半の住居跡は非常に少ないとされます。

いずれにしても、東山道武蔵路に沿って集落が形成されていたことは確認できます。その集落の

性格は上野から分かれて武蔵国府までの間に設けられた5つの「駅家」の一つではないかとされています。東大和市域内では、一・二軒の小集団が点のように生活しているとき、狭山丘陵の東端にこのような集落があったことは東大和市域にも何らかの影響があったものとおもわれます。



3 平将門 (たいらのまさかど) の乱

938(天慶元)年、貴族社会を驚愕させ、武士の世の到来を予告する、まさに古代から中世に移行を告げる象徴的な事件が起きました。舞台は茨城から群馬、栃木、武蔵に及ぶ広範囲でした。役者は①地方豪族、②国衙機構、③役職が終わっても帰京しないで地域へ定着した国衙官人でした。これら三者がそれぞれの利益をかけて争ったのが将門の乱として集約されたようです。

また、同じ頃に瀬戸内海で発生した藤原純友の乱とあわせて「承平・天慶の乱」とも呼びます。将門の足跡を追うと当時の武蔵国の様子が見えますので、ごく大要を紹介します。

(1) 平将門の乱 (体制への抵抗)

将門は高望王(たかもち)を先祖とします。下総北部を地盤としていました。当時の名家の若者の多くがしたように、都に上り、位を得るための働きかけをしていました。その最中に、故郷の領地を巡る問題が発生し、帰郷します。そして、935年(承平5)以来、一族の平国香、平貞盛、良兼、良正らと領地や婚姻を巡って身内同士の合戦を繰り返していました。

938(天慶元)年2月、国司・武蔵介(むさしのすけ)源経基、権守(ごんのかみ)・興世王(おきよおう)が租税徴収確保のため足立郡内に巡検を強行します。これに対して、土着豪族で足立郡司であった武蔵武芝が反発して争いが起きます。原因は、国司側が古くからの税の未納を取り立てようとするのに対し、郡司は武蔵ではそういう習慣がないと主張することになりました。

興世王と経基は武装して強引に入部し、郡司の館と周辺の民家まで封印してしまいます。郡司・武蔵武芝は山に隠れて抵抗します。将門は見かねて、従類を率いてこの事件の調停に乗り出します。将門の仲介は一応成功して、権守興世王と郡司武芝が国庁で手打ちの盃を挙げようとしていたとき、遅れてきた経基と武芝の後陣の者が、それを知らずに衝突事件を起こしました。

経基は、皆が共謀して自分を討とうとしたものと疑い、京都まで逃げのぼり、将門・興世王・武芝が共謀して謀叛事件を起こしたと訴え出ました。経基は後の源氏の統領となる人です。

将門の私君である太政大臣藤原忠平が将門の謀反の真偽を調査させます。将門は常陸・下総・下野・武蔵・上野五カ国の豪族の上申書を集め、謀叛は無実であることを答申します。これらが功を奏して、将門は罪を問われませんでした。



朝廷は、この事態を重く見て、上総介・百済王貞連（くだらのこにしき さだつら）を武蔵守に任命し、坂東諸国に部内肅正を命じます。しかし、百済王貞連と興世王は協調せず、不和となります。興世王は帰京せずに、将門に身を寄せます。

この辺りから武蔵国は群盗が横行し、不穏な空気が高まります。政府は、939(天慶2)年6月16日、武蔵権介小野諸興・上野権介藤原惟条（これつな）・相模権介橘是茂（これもち）を押領使に任命して群盗追捕を命じます。また、問武蔵国密告使（=推問使・すいもんし）として嵯峨源氏の俊（すぐる）が選ばれます。

①在地豪族、②国衙機構、③地方へ定着して帰京しない官人たちの間では、利害を巡って緊張が高まり、それぞれの権門がバックになって利益を求め、武蔵、常陸とも一発触発の空気が満ちてきました。

将門は、国衙権力の蔭で身内の一族が行った将門追討や徴発に乗り、逃げ込む身内を追うことから常陸国府を攻略する事態になってしまいます。その行動を在地豪族が支援する面もあり、将門は

12月11日、下野国府を占領、12月15日、上野国府を占領と軍事を拡大します。

そして、武蔵・相模を巡検して国印を奪い、除目を行い、新皇を称し、平将文を相模守に任命します。940（天慶3）年1月中旬、将門が武蔵、相模などを制圧して帰郷、再度、常陸に出兵します。

しかし、国家反逆罪を背負った将門は豪族たちの支援を失い次第に勢力を弱めます。政府は藤原忠文を征夷大將軍に任命し将門征伐を命じます。これは功を奏しませんでした。2月14日、将門の身内であり戦い相手である平貞盛に藤原秀郷（ひでさと）が加勢し、連合軍となり、将門は討ちとられました。

（2）将門伝承

将門の動きが武蔵に及んだため、神田明神を始め伝承が各地に残ります。

東大和市 三光院

「天慶二（九三九）年、平将門の乱を鎮めたのは、藤原秀郷・平貞盛であるが、その秀郷が陣中に祀っていた不動明王が、その後永樂年中武田信玄の手に移り、更に北条氏政が奪い相模国築井に安置し、天正一八（一五九〇）年、北条氏滅亡後、徳川家代々の武将が崇敬している像ということで、多摩郡宅部村三光院に移し祀っていた。そして延享四（一七四七）年幡ヶ谷村（現・渋谷区）荘厳寺に安置した。」と。同じようなことが、『江戸名所図絵』にも『荘厳寺の沿革』にも述べられている。（多摩湖の歴史 p 206）

瑞穂町 阿豆佐美天神社

寛平年間（889～898）、高望王の造営である。この社の宝庫には、太刀と二股の鞭竹が納められている。これは、鎮守府将軍平良将が東夷征討に際して、当社に祈願して、勝利を得たので、奉納したものであるという

青梅市 金剛寺

承平年中、平将門がこの地に仏縁を結び、一枝の梅をさして、「我が願いが成就するなら栄えよ。そうでなければ、枯れよ。」と誓ったところ、梅は新芽を出して繁茂した。将門は、誓いの効果を喜び、この寺を建立した。都の寛空僧正に依頼して、弘法大師自作の遺像をここに下し、開祖に擬し、寺名を金剛寺とした。さらに、将門の守護仏、阿彌陀像を安置、無量寿院と号したという。



所沢市山口 来迎寺

本尊の阿彌陀如来は藤原秀衡の守り本尊とする。山門の前の説明版に『昔、奥州平泉、藤原秀衡の守護仏であった阿彌陀三尊を源頼朝の所望により鎌倉に運ぶ途中東京都府中市車坂まで来たところ、車が急に動かなくなり、やむなく引き返した。この地まで来たが、再び車が停まったので、草庵を建てて三尊を安置したと伝えられる。』

と記されています。この寺は鎌倉時代の創建といわれます。

4 武士の誕生

平将門の乱では、武士らしき人々によって戦いが行われていることがわかります。そして、武蔵権介小野諸興が押領使に任命され、群盗追捕を命ぜられています。武士の発生について、最近の学説は大きく変わってきました。府中市の歴史は端的に次のように述べています。

『将門の乱の歴史的評価とは、乱が結果的に国衛の組織と軍事力を強化させ、王朝国家体制を強固なものにし、京都の貴族政権を延命させたという点にあった。さらに、二五〇年後の次代を担う武士の発生の原点もまたここにあったというべきであろう。律令国家が崩壊して武家政権が生まれたのではなく、王朝国家のなかから武士の政権が誕生したのである。』

武士は国府で誕生した、ということも可能である。律令国家が衰退し治安が乱れ、地方の豪族たちは領地を守るための自衛手段として武士化していった、とかつては考えられてきた。ところが近年では、武士は一種の職能で、治安維持の専門職として、平安京や各地の国府で認められたことが武士の起源であるとする学説が有力になっている。』(p161)

(1) 牧の管理者

武蔵の武士団の発生母胎を調べると、「牧」の管理者が多いことがわかります。武蔵国には、その地理的条件から、古代から国に納める馬を放牧する「牧」(勅使牧)が設けられました。最初は
石川牧(八王子市・多摩市) 小川牧(あきる野市) 由比牧(八王子市)

の3牧 30匹(後に60匹)でしたが

延喜9年(909) 立野牧(横浜市) (15匹)

承平元年(931) 小野牧(府中・多摩市) (40匹)

承平3年(933) 秩父牧(秩父市) (20匹)

が加わっています。その後、

小野牧 延喜17年(917) 陽成上皇の私牧

秩父牧 延喜3年(903) 宇多上皇の私牧 承平元年(931) 朱雀天皇の私牧

となって、官牧から天皇の私牧に変化しました。この牧の管理者が武蔵国府に勤務して一定の地位に就き、武士になります。例えば、押領使に任命された武蔵権介小野諸興は小野牧の管理者で、後に横山党を分出しています。また、武蔵武士団で最大の規模を誇った「秩父氏」は秩父牧の管理者であり、武蔵総検校職として国府の権限を掌握しました。

その実態を追うと、秩父牧の「牧司利春」＝「高向利春」は、延喜10年に武蔵権少掾(ごんのしょうじょう＝現地採用の国衛の三等官)、同11年武蔵介(すけ＝次官)、同18年武蔵守(かみ＝長官)、延長6年(928)甲斐守となっています。

(2) 国府に勤務する在庁官人(火・日奉氏の例)

国府に勤務する役人が武士化した例で、村山党を理解する手がかりとなるのが、火奉氏(日奉氏)です。現在の日野市、あきる野市一帯に勢力を広めました。鹿児島県の甑島に火奉氏(日奉氏)の一族である小川氏の系図が残されていて(焼失)、武士化の過程がよくわかります。

現在の日野市・日野宮神社(栄町)を中心に祭祀集団として勢力を張った火奉氏(日奉氏)は武蔵国府の役人として

①書生職(国府の記録と文書保管)＝一庁官

②駄所職(国府の馬による陸上輸送を管轄)＝二庁官

の職掌を果たしつつ

①からは細山・由木・川口・長沼・田口・上田・平山・小川・二宮の各氏

②からは狛江・田村・土淵・立川(立河)・稲毛・須恩寺の各氏を分出していることが記されています。

注目すべきは、その系図に「貫首」の書き込みがあり、貫首は国府に勤務する在庁官人であることが明らかになりました。後に紹介する村山党の党祖「頼任」(よりとう)が「村山貫首」と呼ばれ、国府と何らかの関わりを持つことが想定されます。

II 山口さんが領主様？

東大和地域を本拠とした武士は誰でしょう？ 簡単なようですが、実は結論が出せません。周辺から絞り込む以外にはないようです。やむを得ず遠回りして、東大和市周辺の状況を紹介します。

1 武蔵国に群がった武士団、武蔵七党

武蔵国に分布した武士団は、大きく坂東八平氏、武蔵七党に分けられます。



(1) 坂東八平氏

『坂東八平氏とは、寛平二年(八九〇)に平姓を賜り、上総介として赴任した桓武天皇の曾孫の高望王の子孫で、秩父・千葉・上総・土肥・三浦・大庭・梶原・長田の各氏をいう。』(狭山市史上 p 203)

『坂東八平氏とは、平将門の乱に現れた桓武平氏の後裔、とくに将門の父忠将の弟の良文と良茂の子孫が武蔵・相模・下総・上総の関東地方南部に分かれて土着し、その地名をとって名(名字)としたもので、貴族の子孫として中小武士団を配下につけて勢力をひろげた秩父・千葉・上総・三浦・大庭・長尾・梶原・土肥の八氏族とされている。』(入間市史 p 201)

二つの市史を比較してみました。長田と長尾の違いがありますが、あとは同じ氏族をあげています。東大和市に近い秩父氏は他の論者も必ず加えます。また、頼朝の旗揚げの際にも、その後にも関わりがあるので、関係の深かった武士団として秩父氏を中心に紹介します。

(2) 秩父氏



秩父氏について埼玉県史、福生市史、府中市の歴史から引用します。

埼玉県史

『秩父氏は、鎮守府将軍にも任じられたことのある平高望の五男で、熊谷市村岡(荒川大橋の西南都)に土着して村岡五郎を名のった良文の子武蔵権守忠頼の子の将常が、秩父盆地の中心地の中村郷を本拠としたことから始まるとされる(将常の弟が忠常の乱の張本の平忠常で、この人から千葉氏が始まり、忠常の曾孫常時から上総氏が始まる)。

秩父氏は、将常の子孫があたかも荒川の流れて浮かんで流れるように、その沿岸に土着して発展し、畠山(大里郡川本町)・川越(川越市大戸)・葛西(東京都葛飾区)・豊島(同北区)・江戸(同千代田区)の諸氏となり、一方多摩川下流域にも木多見(東京都世田谷区)・丸子(神奈川県川崎市)・稲毛(同川崎市)・六郷(東京都大田区)・小山田(同町田市)をはじめ多数の枝葉に分かれて発展している』(「埼玉県史通史編1」664)。

福生市史

『秩父一族とは主に秩父・畠山・河越・江戸・豊島・葛西・小山田・稲毛・榛谷(はんがや)の諸氏をいうが、先にも述べたように桓武平氏の平良文の子孫であるとされている。一族の元となった秩父氏は秩父郡の官牧の別当(監督者)であつたらしい。

秩父氏は清和源氏の頼義・義家の前九年の役(一〇五一～六二)に従軍して以降、武蔵国内に勢力をもち子孫を各地に進出させた。その背景には秩父氏が清和源氏の力を後立てとして、代々武蔵国留守所総検校の職にあり、武蔵国衙の在庁官人を総監する立場にあつたことによる。その勢力範囲は先述したような荒川流域のみならず、国府(府中市)近くの私牧(小山田牧=町田市域)を中心にした多摩郡から橘樹郡(川崎市・横浜市)あたりにも勢力を持っていた。』(福生市史上 p 170)

府中市の歴史

『武蔵国衙の在庁官人のうちまずあげられるのが、武蔵国秩父郡を本拠とした秩父氏である。一〇世紀に反乱を起こした平将門と同じ桓武平氏で、『尊卑分脈』などによれば、高望王の曾孫にあたる将常が武蔵権守となり、本拠を秩父郡中村郷に移し秩父氏を称したのが始まりとされる。将常の子武基は秩父牧の別当、その孫の重綱が出羽権守でかつ武蔵国留守所惣検校職となる。『吾妻鏡』によれば、秩父氏から出た河越重頼が治承四年(一一八〇)までに秩父氏の家督を継承し、嘉禄二年(一二二六)、その子重員が重綱以来相伝の留守所惣検校職に任命されている。同職は秩父氏一族の家督であるとともに、武蔵国衙の在庁官人を統轄し、武蔵国内の武士団に対する統率権を有したとされ、国内の政治と軍事に極めて重要な役割を担う役職であつた。

最初に留守所惣検校職に就任した重綱は、久安四年(一一四八)に比企郡平沢寺(埼玉県嵐山町)の経筒を奉納した「当国大主散位平朝臣しげ縄」と同一人物であろう。「当国大主」という肩書きも同職と関係があると思われる。・・・一世紀に成立した武蔵国衙の在庁官人制のなかで、一二世紀中頃には秩父氏をそのリーダーに持ち上げたのである。』(府中市の歴史 p 172)

後に紹介しますが、秩父氏の一族の中で、注目すべきは河越氏です。

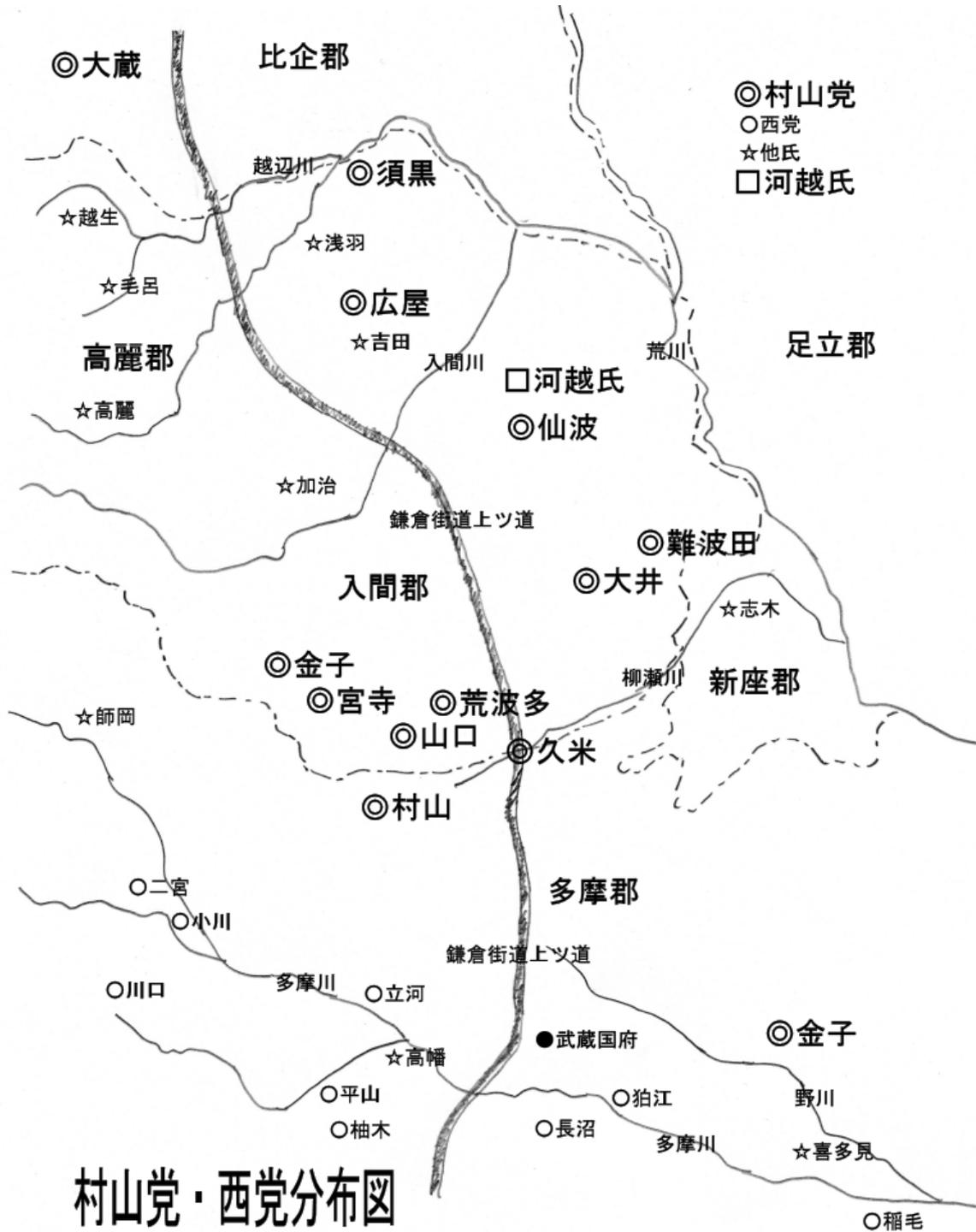
(3) 武蔵七党(入間、多摩地方の武士団)

東大和市に最も近い武士団が「武蔵七党」でした。どの党をもって「七党」とするかについて、諸論があります。入間市史と東村山市史から紹介します。

入間市史

『武蔵七党は武蔵国内に本拠をおいて周辺に血縁をもとに発展していったグループで、中小規模の武士団とみられている。七党とよばれる七つのグループについては、十四世紀南北朝時代の成立

といわれる『武蔵七党系図』で、横山・猪俣・野与・村山・児玉・丹・西の七党としているが、野与党の代わりに私市党（きさいち）を、また村山党・西党の代わりに綴党（つづき）・私市党を入れる説もあるので、必ずしも七の数にこだわることなく、武蔵国内にいくつかの有力武士団があり、その代表的な呼び名と考えてよからう。』（入間市史 p 201）



東村山市史

『秩父氏や豊島氏などの大武士団が活躍していた頃、「武蔵七党」と総称される中小武士団も登場してきた。武蔵七党とは、平安時代末期から室町時代にかけて武蔵国に存在した同族的武士団の総称であるが、当時の呼称ではなく、おそらく南北朝・室町初期の中世後期になって定着した呼称で

あると考えられている。

実際、七党が具体的に何党と何党とをさしているのかも確定できないのが現状である。たとえば、「武蔵七党系図」（『続群書類従』第四輯上）では、野与・村山・横山・猪俣・西・児玉・丹を七党といい、『節用集』（日本古典全集）では、丹治・私市・児玉・猪股・西野・横山・村山を七党としている。さらに、村山党の代わりに綴（都筑）党を入れたり、私市・綴党を除いて野与・村山党を入れるなど、一定をみていない。平安時代末期から確定していなかったのであろう。

武蔵七党の主な勢力範囲を示すと次のようである。

野与＝埼玉県埼玉郡一带

村山＝狭山丘陵の周辺から川越市にかけて

横山＝八王子市の南側

猪俣＝埼玉県大里郡一带

西＝府中市の西側。立川市にかけて

児玉＝埼玉県児玉郡一带

丹＝埼玉県秩父・児玉・入間の諸郡

これらのことから考えられることは、彼らの勢力範囲が利根川より西の関東平野に広がっていたことである。

それは先述した秩父氏・豊島氏と同様であった。利根川より西の関東平野には、秩父氏一族と武蔵七党などの大小武士団が群居していたのである。このような状況になったのは、利根川の北側や東側のように、足利氏や新田氏さらに小碓氏などの豪族の武士団が勢力を張っていなかったことも一因といえよう。』（東村山市史上 p 359～361）

今回の講座は村山氏に深い関わりを持ちますので、村山氏については項を改めて紹介します。

（3）立川氏

東大和市の周辺で関わりのあった武士は「立川氏」でした。立川氏は武蔵七党の西党に属し、現在の立川市・普濟寺（多摩川近く）に館を構えていました。立川民俗資料館・小川 始氏の論文から紹介します。

『日奉氏一族ではじめて立川を名乗るのは「日奉氏小川系図」によれば駄東次宗時という人物であるが、この人は鎌倉時代以前の人物と目され、立川氏が立川市域へ定着したのは古代末期ころと推定されている。

他方、「立川系図日奉氏(a)」では駄五郎宗時（「日奉氏小川系図」の駄東次宗時にあたる）の子、宗恒と宗重の代から立川を名乗っている。

鎌倉時代になると、貞応元年(一二一三)に日奉時安の譲状写が確認される(一号文書・一五頁No.9)。この文書は日奉時安が嫡男の日奉時直へ所領を譲り渡しているものである。・・・

立川氏について、まず史料で確認できるものは駄東次宗時の孫、経成とその子の経光、職泰のものである。

寛喜元年(一二二九)の石清水八幡宮文書に見える「立河馬允径成」という人物が「日奉氏小川系図」の「経成」とみられている。彼は仁和寺領丹後国上河品田の地頭として西遷し、丹後国永富別宮神人を殺害して訴えられている。系図中に「承久宇口河内」の注記があることから承久の乱の恩賞として入部したものと考えられる。その後、「径成」の家系が「立河馬入道跡」として鎌倉幕府の公事賦課単位として把握されていった。径成は「立川系図日奉氏(a)」では恒成(馬入道)と書か

れ、子孫が馬入道跡とされたこととも合致する。

次に鎌倉幕府の正史「吾妻鏡」第三十二巻に「立河三郎兵衛尉基泰」という人物が登場する。まづ暦仁元年(一二三八)二月一七日の条には將軍藤原頼経上洛の随兵として従った一九二騎のうちの一六番目に小河左衛門尉、河口八郎太郎とともに立河兵衛尉の名がみえる。その一日後の二八日の条には、將軍頼経の中納言拝賀の行列に直垂帯剣姿で従う一〇人のなかに立河三郎兵衛尉基泰の名がみられる。そして、六月五日の条には、將軍頼経が春日社に参詣した際、輿の左右に直垂帯剣姿で従う一〇人のなかに立河三郎兵衛尉基泰の名がみえるのである。さらに、六年後の寛元二年(一二四四)八月一五日の条に將軍頼経が鶴岡八幡宮での放生会に参る際の供奉人に立河兵衛尉基泰の名をみることができる。』(「多摩のあゆみ」118号p18「寄贈された立川氏関係史料」)

これからすると、立川(立河)氏は「駄東次宗時」と名乗るところから、国府に勤務する、馬に関係する役職を持った人であることがわかります。また、福生市史では西党(立川氏もこの一族)の多摩川流域展開を12世紀としています。

『西党は在庁官人日奉氏を中心に展開するわけであるが、12世紀以降に多摩川流域に分派し、一庁官系からは細山・由木・川口・長沼・田口・上田・平山・小川・二宮の各氏が、二庁官系からは狛江・田村・土淵・立川・稲毛・須恩寺などの各氏が分出している。一庁官系の小川・二庁官系の由井などは、南多摩丘陵の小川牧・由比牧の管理者として活動し、また国府に近い得恒・土淵郷(いずれも日野市付近)に勢力を持っていた。』

また日野市の落川遺跡では、11世紀後半と思われる柵跡をともなった建物跡があり、武士の館跡ではないかと注目を集めているが、もし武士の館跡ならば、西党の武士のものであろう。小川牧が多摩川と秋川の合流域に推定されることから、本市域には関係の深い党といえる。西党は横山党のように有力氏を持たず、各氏がほぼ対等な力関係にあったといわれる。』(福生市史上p176)

2 村山党

武蔵七党の武士団に属し、狭山丘陵周辺に拠点を置いたのが「村山党」でした。村山党の系図があり、党祖＝貫首からそれぞれに分派し、近接地域に棲み分けたことがわかります。

(1) 郷土の武士団

村山党は秩父氏一族と火奉氏(日奉氏)一族が構成した武士団の空白地＝狭山丘陵周辺に拠点を置きました。村山貫首を除いては、分出した一族の所在はほぼ推測できます。ところが肝心の党祖＝村山貫首の拠点が不明です。

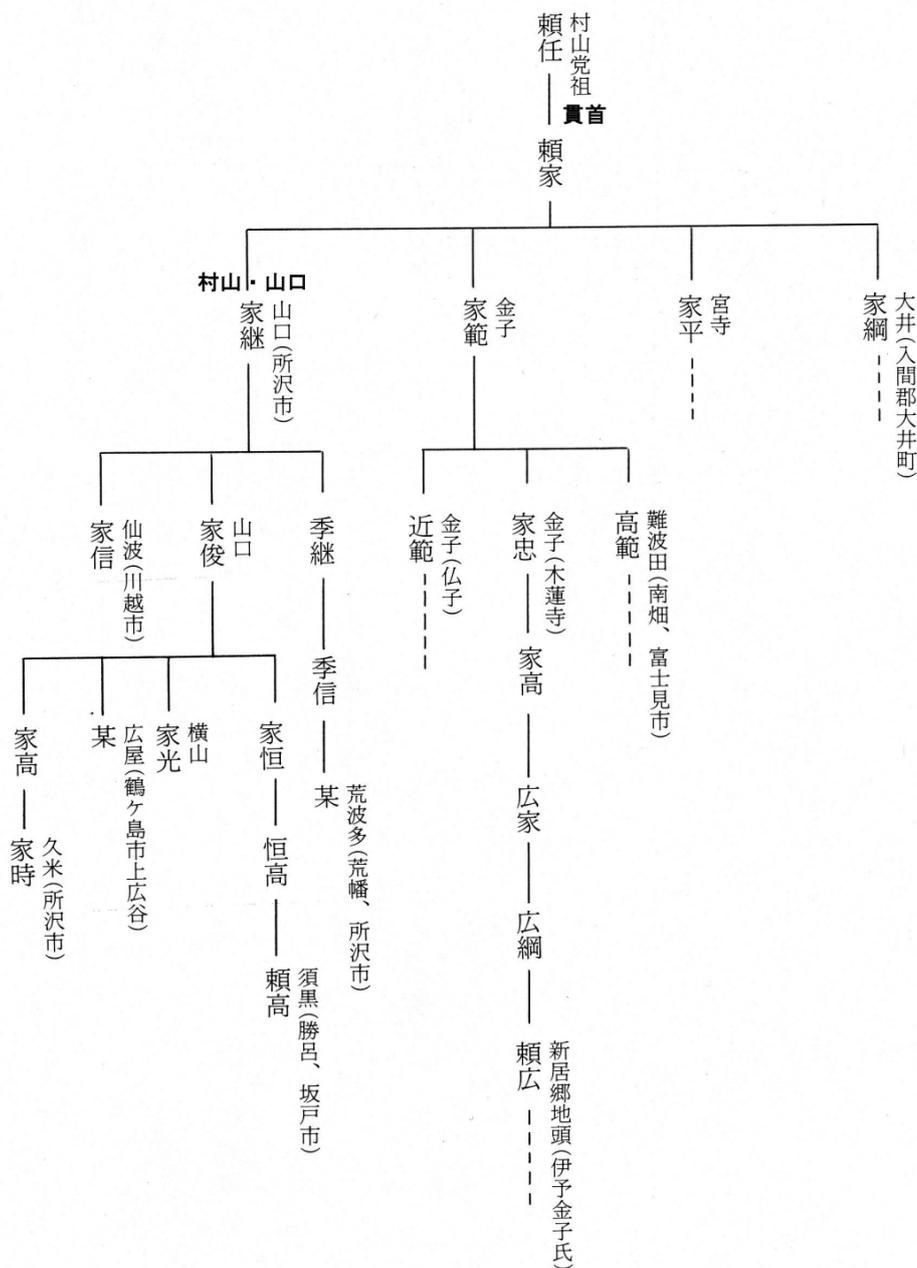
狭山丘陵南麓の区域を治めた武士団がはっきりしないため、瑞穂町、武蔵村山市域に村山党貫首の拠点があったとする説もあり、系図から求めるのは無理で、もともと、系図のような「村山党」というまとまった武士団はなかったとする説もあります。東村山市史と武蔵村山市史は次のように説明します。

東村山市史

『・・・、系図によればこの「村山貫首」という名乗りは頼家までで、その子孫は名乗っていない。村山党は、頼家の後四家に分立したようだが、その名乗りを見ると、大井・宮寺・金子・山口であった。そして、その四家のなかからさらに難波田・仙波・須黒・久米・荒波多・広屋氏などの諸氏が分立していった。これらの名乗りの地名からも明らかなように、村山党は狭山丘陵周辺を拠点にしつつ、川越・児玉方面に勢力を拡大していったことがわかる。』

と同時に注目しなければならないのは、山口家継が一時「村山小七郎」と名乗っていたようだが、後に「山口七郎」に変えているように、実は「村山」を名乗るのは頼任と頼家の二代だけであって、その後は「村山」を名乗る家なくなっていることである。このことから、本来的に村山党などというまとまった同族的な武士団は存在せず、「村山地方を中心として分布していた小武士団の諸氏が、頼任・頼家という共通の祖先から出たと称して団結を強めたとみる方がよさそうである」という評価も可能になる(前『東村山市史』・一九七一、一八八頁。)(東村山市史上 p 363)

村山党系図



所沢市史、入間市史をもとに作成

武蔵村山市史

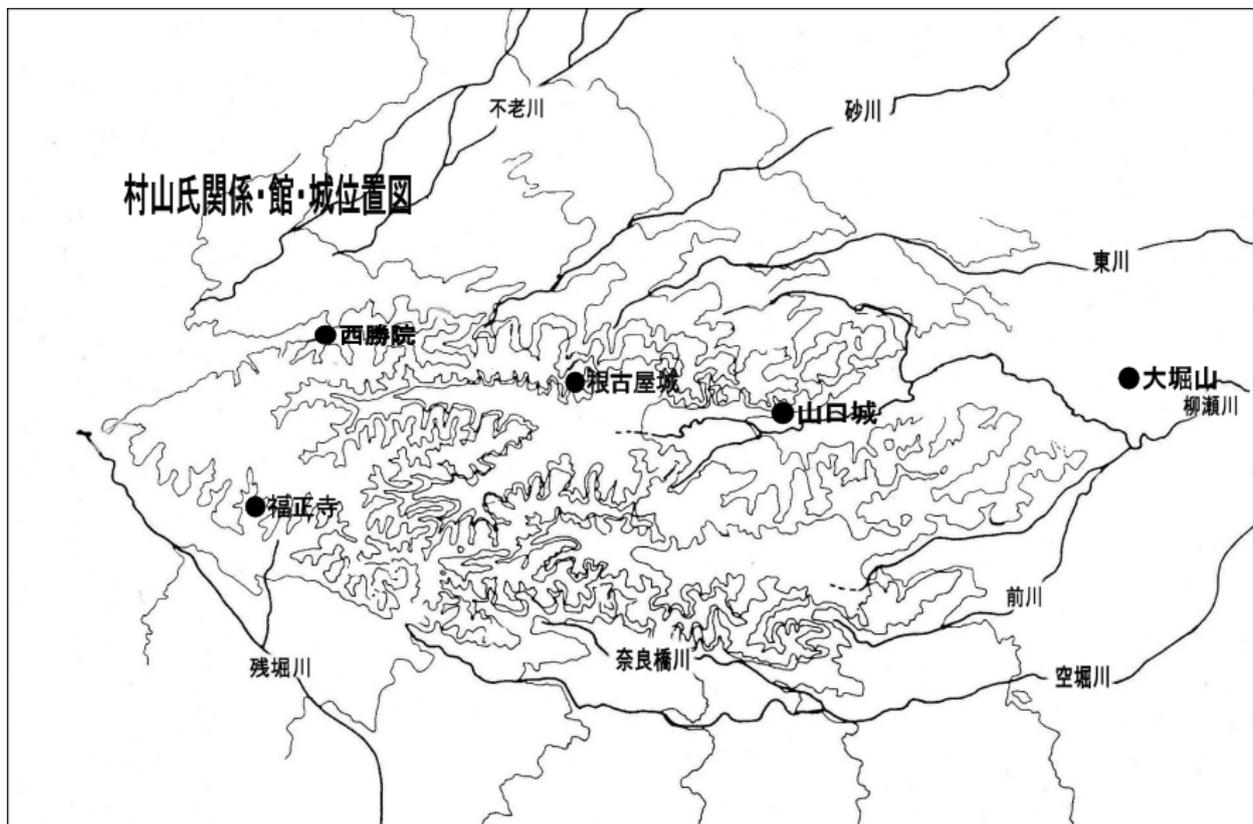
『村山党の「村山」という名字は、いわゆる里山の分布する地域にはいくらかでも見られる一般的なものだから、この名字の詮索から、発祥の地を特定しようとしても無駄である。また、中世後期～近世の頃には、狭山丘陵西南の殿ヶ谷・岸など五か村を「村山郷」と呼んだというから、そのうちどこかに発祥の地を選定したがる向きもあるが、中世後期以降の「村山郷」が、古代～中世前期の「村山郷」と同じものだったという保証は何処にもない。

村山党のふるさと捜しは、なごり惜しさを残しながらも、狭山丘陵西半部の何処かあたりという認識にとどめておくしかないようである。・・・』(武蔵村山市史上 p 439)

なお、瑞穂町史は

『ともあれ、村山頼任は狭山カケ丘の麓、現在の東村山、東大和、武蔵村山の各市から瑞穂町あたりにかけて根をおろした関東武士だったのであろうか・・・。』(p145)とし、東大和町史、東大和市史は触れていません。これからの研究に委ねられているようです。

(2) 村山党の武士の館



狭山丘陵周辺に本拠を構えた村山党の武士の館はいくつかを訪ねることができます。

- ・ 山口氏は峰一つ越した北側に館(山口城)を構え、後に、西側の現在山口貯水池に沈んだ部分に根古屋城を築きました。
- ・ 久米氏の館跡ではないかとされる大堀山は、遠望は出来ませんが、堀跡などを直接には見るができなくなりました。
- ・ 村山氏の館跡とされる福正寺周辺は専門家の案内を乞わないと見当も付きません。寺内に墓石が残されています。
- ・ 宮寺氏の西勝院には土塁が残されています。
- ・ 金子氏の木蓮寺には館の形が残されています。

山口城

山口城は開発が進み、城館跡の景観は見られなくなりました。注意してみると土塁が残されていて、規模などを追うことができます。



山口城跡に残されている土塁

説明版によれば右画像のような形で残されているとされる。100メートルぐらい北方に離れますが、山口小学校の南西により原型と思われる姿が残されています。



山口城は東大和市と関係が深かったことが考えられますので、所沢市史から、概要を紹介します。

『山口城は、先述したように初代家継以来、山口氏の歴代居館として国時代まで利用されたことは事実である。この城は、当初館から出発して、後世に城郭の様相を具備するように改造されたので、規模も拡大されるとともに、土塁や空堀も雄大となった。ただ西武鉄道や主要地方道所沢武蔵村山立川線が東西にこの城跡を横断し、柳瀬川の河川改修もあって、遺構がかなり破壊されてきたことは残念である。

測量調査によって、山口城の規模は東西二〇〇メートル、南北二〇〇メートルであり、いちおう多郭式の平山城(館城)であったことがわかった。城郭は本郭を中心にして、東西の両郭と、東北部の出張部分とがあり、なお南部にも郭の存在が認められる。現在、土塁の残存している箇所は、東部と西部に部分的に確認できるに過ぎないが、試掘溝を入れたところでは、土塁の高さ四メートル、堀の深さ一・九メートルとなっており、この堀は当時水堀であったこともわかった。山口城は、北方が狭山丘陵、南方が柳瀬川に面し、北方から南方にかけて緩傾斜をなしている。

なお鎌倉街道に面しており、当時交通の要衝にあったわけである。したがって山口城は、元弘の変に際して新田義貞が鎌倉攻めをしたときにも、これを阻止しようとした鎌倉方と激戦がかわされたことが『梅松論』の中で次のように記されている。

五月一四日(元弘三年)、高時の弟左近大夫將監入道惠性(泰家)を大将として武藏國に発向す。同日、山口の庄の山野陣を取つて、翌日一五日、分配開戸河原にて終日戦けるに命を落し疵を蒙る者幾千萬といふ敷をしらず。

山口城は、室町時代の末期には城郭として大規模な改造が行われて、その規模が拡張されたものの本来が館であったために、山口氏としても別個に本格的な城郭として根古屋城を築かねばならなかった。したがって、戦国時代においては、山口城の城郭としての機能はむしろ根古屋へ移ったと見ることができよう。しかし、鎌倉街道沿いに立地するこの城は、狭山丘陵という天然の要害を利して、その後も存続したのであった。

山口城は背後に丘陵を控え、前方には柳瀬川をめぐらして、比較的防衛しやすかったと考えられるが、それでも東北方には、梨の木戸、東方には藤の木戸という防御施設を設けていた。』(所沢市史中世資料 p 13)

なお、根古屋城は貯水池敷地内に水没せずに残されているため、入間郡の中世の城として完全に保存されることになりました。立ち入り禁止のため、見ることはできません。

大堀山館

久米氏の館と想定されていますが、周辺の開発が進み、道路際から望むだけで、内部は見られません。



所沢市北秋津 353-1 にあります。400 ほどほど南方に柳瀬川があり左右の地形、山口城と滝の城の中間の位置から見て相当の規模の館があったと思われます。所沢市では単郭方式の館跡と位置づけていますが、詳細は不明のままです。所沢駅下車、東口に出て八雲神社、日月神社方面に進めば道路から画像の景観が見られます。

福正寺

武蔵村山市から瑞穂町にかけては「村山郷」があり、殿ヶ谷戸の地名を残すこともあって、村山氏の郷(さと)として、居館の存在が指摘されてきました。調査の結果村山党の内の金子氏の一族であることがわかり、現在では、村山貫首の系統とは別に考えられています。

福正寺に、村山土佐守一族の墓と伝えられる一隅があり、五輪塔が残されています。また、阿豆佐味天神社には文明 14 年(1482)に



村山土佐守が社殿を修復した記録とともに、天正15年8月22日に没した記録があることから、この時期に活躍した武将であることがわかります。

西勝院

入間市の西勝院は宮寺氏の館跡と伝えられています。現在でもその一部が見られ、また、寺の周囲を流れる川は当時の堀跡とされ、全体として中世武士の館の雰囲気が残されています。



山門前の説明版には次のように記されています。

『・・・村山(平)頼任の子、頼家には四子があり、その二男の家平が宮寺の領主になって宮寺五郎家平と称して、この居館を構えたのである。

すでに八百年以上も昔のことであり、この居館跡の全体遺構を見ることはできないが、西勝院境内南側・東側の土塁と空堀また、山門手前左側土塁の痕跡は明らかに当時の遺構の一部である。さらに西側を流れる溝が館の堀であったと推測され、したがって内側に土塁が構築されていたと考えられ、この溝は西勝院の境内を囲むように西側から北側に流れている。

鎌倉幕府が滅亡(西暦一三三三年)時には、加納下野守が、ここに住んだと伝承され、江戸時代には伊能尾(狩尾)氏が住んだと伝えられている。

昭和五十九年七月

入間市教育委員会 』

金子氏の木蓮寺

(3) 東大和の領主さんは誰？

さて、村山貫首の拠点の所在地は不明として、東大和市域の中世の領主は誰だったのでしょうか？大和町史では、東大和市内から発見されている板碑から、山口氏に属していたとします。東村山市史では、現在、正福寺に保存されている貞和五年（1349）銘の板碑の造立者から山口氏を類推しています。

大和町史

『大和町の地域も、勿論村山党の勢力範囲の中にあつた。当時は大和町のすぐ北、現在の所沢市山口の地に村山氏の一族である山口氏が居館をかまえていたので、地理的に極めて接近した関係から、大和町の地も山口氏の支配下にあつたと考えてよいであろう。川村・杉山両氏の報告書には、大和町の板碑をほとんど山口氏関係のものとして推察しているが、この考えはまづ妥当といえると思う。

(p164) 中略

山口氏、さらにこれに連る村山氏一族の動静については、信頼すべき史料は殆どない。こうした武士達の様子については、極めて断片的な史料を綴り合わせ、想像・類推によってそれを補足しているにすぎず、これ以上の深い考察は困難である。彼等の実態については、現在なお不明なところが、あまりにも多すぎるのである。しかし、こうした板碑などについて、可能な限りにおいて少しづつでも手がかりをさぐってゆくことにより、今まで全く判らなかつた彼等の実態を、幾分なりとも明らかにし得られるのではなからうか。』(p167)

旧東村山市史

正福寺に保存されている貞和五年（1349）銘の板碑をもとに

『これほど大きな板碑を造立できるものはかなり有力な領主であつたに相違ないし、禅宗系の信仰を示す釈迦如来の種子と仏生日（釈迦誕生日）に当たる四月八日の日付が刻まれていることも領主層に相応しいと考えられる。

造立者の帰源は野口村の含まれる宅部郷一帯の領主ではなからうか。所沢市岩崎の瑞岩寺にある宝篋印塔銘の「帰実禅門」が領主山口高治の法名と伝えられることも考えあわせるべきであろう。』

(東村山市史 昭和 46 年 P 334)

難しい問題ですが、この講座の最後に、一つの手がかりをお伝えしたいと思います。

3 武士の戦い

(1) 前九年・後三年の役

1051（永承 6）年、奥州の豪族安部頼時が陸奥国司に反抗したことから、政府は源頼信の子頼義を陸奥の守兼鎮守府将軍に任命し、制圧をはかりました。頼義は坂東の武士団を配下に遠征し、1062（康平 5）年まで戦い、苦戦の末解決した事件があります。これを前九年の役としていますが、この時、源頼義の軍に横山経兼らが戦列に加わり出羽に遠征をしました。



1083（永保3）年～1087（寛治元）年にかけて、奥州最大の豪族である清原氏の内紛から内乱となりました。陸奥守源義家が調停に乗りだし、相模国を拠点に関東の武士団を動員して、奥州に送り込みました。苦戦しますが藤原清衡の協力を得て金沢柵で勝利をしました。後三年の役と呼ばれます。

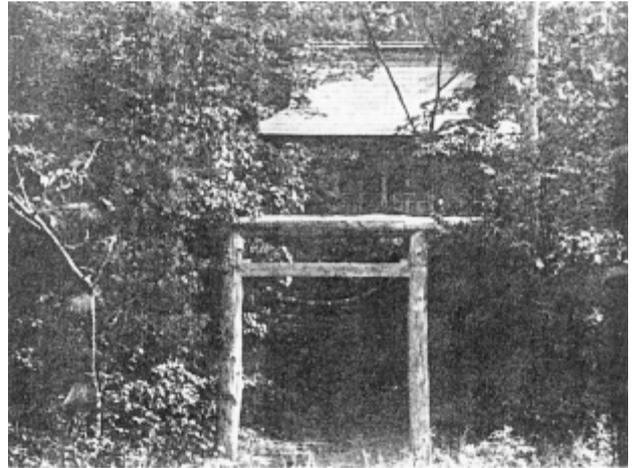
この時、武蔵武士団も従軍したと考えられ、両戦役を通じて、源氏の頭領と武蔵武士の繋がりが深くなったとされます。また、16歳で戦陣に加わった鎌倉権五郎景正が、右目を矢で射られてなおひるまず敵を射倒し、陣へ戻ってから仰向けに倒れた。そこで戦友、三浦為継が矢を抜いてやろうと額に足をかけてふんばると、景正が怒って下から斬りつけた。為継が驚いて聞くと、武士が矢に当たって死ぬのは本望だが、生きながら顔を踏まれるのは恥だと景正が答えた。

との「奥州後三年記」の逸話が生まれました。

内堀の御霊神社

この逸話が広まり、各地に鎌倉権五郎景政を祭神として御霊神社が祀られます。東大和市にも湖底に沈んだ内堀に御霊神社が祀られていて、次のような伝承を残しています。

『湖底の村に建立された最初の神社は御霊神社のようである。奈良橋押本家にある『御霊神社々伝』にのっている口碑伝えるところによると、「後冷泉天皇の御代（一〇四五～一〇六八年）、陸奥の豪族安部頼時が反乱をおこした。



朝廷は源頼義をして之を討たせた。その時、当所大宅郷（宅部のことか＝筆者）に、大宅大夫光任（みつとう）および寺島小十郎等がいて、官軍（傍点筆者）に従い、同所の高い丘陵の上で旗揚げし、神壇を設け、武八神を祀り、以って戦勝を祈願した。後に頼時ら誅に伏し、余賊を皆平げた。里人等神霊のあらたかであることを感謝し、康平六（一〇六三）年、祠をつくって同郷の総鎮守とし、御霊明神と称した」と記されている。

なお『狭山の栞』や内堀家の伝えによれば、寺島小十郎という人物は、鎌倉権五郎景政の家臣で、前九年の役に主人とともに源義家に従軍した人物とされ、後に景政の霊を祀ったのが御霊神社だという。また小十郎はその後姓を内堀に改めたともいう。ちなみに、御霊神社の近くには、源氏・寺嶋・小十郎窪などの地名が残っていた。御霊神社は一九一四（大正三）年の移転の際、狭山神社に合祀された。』（多摩湖の歴史 p205）

（2）保元・平治の乱

保元の乱

保元元年（1156）7月2日、鳥羽法皇がなくなったのをきっかけに、崇徳上皇（兄）と後白河天皇（弟）の対立が尖鋭化します。あわせて以前から藤原摂関職をめぐる対立が深刻化していた関白忠通（兄）と左大臣頼長（弟）の対立があり、これが結びついて後白河天皇と藤原忠通派、崇徳上皇と藤原頼長派の組織的対立が表面化しました。

この対立に、実力者との関係を深め地位の安定を図ろうとする者達が絡んで

「内裏（だいら 天皇方）、仙洞（せんとう 院、上皇方）にこうずる（伺候する）源平両家の兵ども、或は親父（しんぷ）の命をそむき、或は兄弟の孝（よしみ）をわすれ、思ひ思ひ心々に引わかれ、父子・伯父甥・親類・郎従にいたるまで、みなもって各別す（別々の行動）。日本国大略二にわかれて、

洛中(京中)の貴賤上下申あひけるは、世今はかうにこそあれ(このようになって)。ただ今うせはてなんずるにこそ(今になくなるだろう)。……」(岩波書店日本文学大系「保元平治物語」)

の状況でした。7月10日の夜中、戦いは起こり、天皇方が上皇方を攻撃して、上皇方が敗れました。天皇方に源義朝と平清盛がつき、上皇方に、源氏では義朝の父為義と弟の為朝、平氏では清盛の叔父の忠正がつき、骨肉相分されました。

この戦いで、義朝について武蔵武士は次の通りです。(保元物語)

武蔵国には、豊嶋四郎・中条新五・新六・成田太郎・笈田次郎・河内太郎・別府二郎・奈良三郎・玉井四郎・長井斎藤別当・同三郎・丹治成清・榛沢丹六、児玉には、庄太郎・同三郎・秩父武者・栗飯原(あいばら)太郎、猪俣には、岡部六弥太・金平(こんぺい)六・河句(かくの)三郎・手薄加(てばか)七郎、村山には、金子十郎・山口六郎・仙波七郎、西には、日次悪次(へつぐあくじ)・平山、高家には、河越・諸岡、

◎「村山には金子十郎・山口六郎・仙波七郎」と書かれ、貫首は居ないことに注意。また、金子十郎が初陣で大活躍をしました。

『双方問答があつてしばらく攻防をくりかえしていたが、突如金子十郎家忠は葦毛の馬にまたがって為朝の陣に向かって大音声で「生年十九歳、軍にあふこと是をはじめなり。」と名のりをあげて一騎討ちをよびかけた。それに応じて出てきた高間四郎と組み討ちとなったが、あつというまに四郎を組み伏せて馬乗りになり、まさにその首をとろうとしたところへ、これを見ていた兄の高間三郎が、十郎家忠の後からとびかかって四郎を助けようとした。

十郎家忠はすばやく下なる四郎のとどめをさして、返す刀で三郎を払いのけて立ち上がって兄三郎の首をとり、あわせて二つの首をひっさげて馬をひきよせてゆらりと乗って「武蔵国住人、金子十郎家忠、音に聞えさせ給ふ筑紫の御曹司(為朝)の御前にて、宗との侍二人手討にして罷出ぞや。敵も御方も物のみよや。むかしも今もためしすくなくこそあらめ。かかる晴の軍しおふせて後代に名をあげんずる家忠ぞ。……」と勝ち名のりをあげたのである。』(入間市史)

平治の乱

保元の乱の勝者として、武家の統領の源義朝と平清盛の両者が残りました。そして、後白河天皇のもとで側近の藤原通憲(信西入道)が権力をにぎり、平清盛と結びます。中納言藤原信頼と源義朝は阻害され、藤原通憲との対立が激化します。

平治元年(1159)12月、清盛が熊野詣のために都を離れたすきに、源義朝は中納言藤原信頼を立てて、藤原通憲(信西入道)派を追放し、後白河上皇と二条天皇を擁してクーデターをおこしました。平治の乱です。

義朝のもとに参じた源氏の勢力は、武蔵武士を中心に2000余騎とされます。頼朝は13歳の初陣です。皇居(内裏)に押しこめられていた後白河上皇は、12月26日夜ひそかに脱出に成功します。二条天皇は翌27日未明に、大内裏の西の門、藻壁門(そうへきもん)からの脱出を計画します。

平治物語はここで高まります。

二条天皇は女装して皇后や他の女官たちに囲まれて牛車に乗って門を出ようとしています。この門を警備していたのが金子十郎家忠・平山季重らの武蔵武士でした。牛車につきそう従者は、女官が北野神社にお参りに行くのだと云います。

「金子もなをもあやしくおもひ、弓のはずにて御車の簾をざつとかき上、続松(たいまつ)ふり入れてみまいらせけるに」ついに女装の天皇を見やぶることができずに通してしまふ結果となります。

これで、天皇は脱出して清盛の六波羅邸に入ることができ、一転して平家が官軍となり、源氏は賊軍の汚名をきることとなります。戦況は不利となり、源氏は敗北します。村山党の華やかでもあり一抹の暗さを秘めるときでもあります。

(1) 頼朝の挙兵

1180（治承 4）年 4 月 27 日、後白河法皇第二皇子・以仁王が平家打倒の令旨を頼朝に下したことから、村山党は新たな曲面に立たされます。図のように頼朝の挙兵当初は武蔵武士は支持・不支持が分かれていました。村山党の面々ほどのように割り切ったのか、畠山重忠の衣笠城攻撃に従います。



(2) 衣笠城攻撃

1180（治承 4）年 8 月、三浦氏によって立つ衣笠城攻撃が始まります。吾妻鏡は次のように伝えます。

『廿六日丙午、武蔵国の畠山重忠、且つは平氏の重恩に報いんがため、且つは由比浦の会稽を雪がんがため、三浦の輩を襲はんと欲す。よつて当国の党々を相具して来会すべきの由、河越太郎重頼に触れ遣す。(中略)今日卯の剋、この事三浦に風聞するの間、一族悉く以て当所の衣笠城に引き籠

り、おのおの陣を張る。(中略)辰の剋に及び、河越太郎重頼、中山次郎重実、江戸太郎重長、金子・村山の輩已下数千攻め来る。義澄等相戦ふと雖も、昨〈由比の戦〉今兩日の合戦に力疲れ矢尽き、半更に臨み城を捨てて逃れ去る』



村山党の面々が武勇を競った衣笠城は静で、「今この老齢を武衛(頼朝)に投げ、子孫の勲功を募らんと欲す」と言い放って散った三浦党長老・義明の墓所は質素です。

村山党の参加、金子氏の武勇

この衣笠城の合戦に村山党は参加し、金子十郎家忠は武者ぶりを見せます。『源平盛衰記』から紹介します。

『八月二十九日の早朝、河越重頼・江戸重長・畠山重忠らの秩父平氏が大將となり、金子・山口の村山党や児玉党、横山党、綴党らの三〇〇〇余騎で、低い山城の衣笠城に押し寄せた。まず一番に綴党(神奈川県横浜市西部が拠点)が攻撃して引きさがると、金子十郎家忠が名のりをあげて三〇〇余騎で攻め立てた。十郎家忠は一人で進んで一の木戸、二の木戸を突破して城中を目ざしたので敵の矢の集中攻撃を受けたが、一步も退かずに戦った。これを見ていた城中の長老三浦義明は、徳利と盃を持たせて十郎家忠のところに使を送り「今日ノ合戦二武蔵相模ノ人人多ク見工給へ共、貴辺(あなた)ノ振舞コトニ目ヲ驚シ侍リ。老後ノ見物今日ニアリ。今ハ定テツカレ給ヌラン。比酒飲給テ、今ヒトキハ興アル様二軍シ給へ」と伝えた。十郎家忠は盃を受けて飲みほし、これで力がつ

いたと礼をのべて攻撃を再開した。敵の櫓の下まで進んだところで、三浦方は弓にすぐれた和田義盛が十郎家忠めがけて矢をはなった。十郎家忠は、顎（あご）の下に矢が当たってついに倒れた。これを見ていた弟の近範がすわ大変と十郎家忠を肩に抱き上げて、追いつがる敵を払いのけて死地を脱したと伝えている。』（入間市史から）

2 幕府御家人

安房に渡った頼朝は、房総の武士、千葉常胤や上総広常らの支援をえて、関東の武士に帰順を呼びかけながら、上総・下総を経て武蔵へと進軍を開始します。この間の武蔵武士と頼朝の緊迫したやり取りは息の詰まるようです。

(1) 武蔵武士の帰属

頼朝が江戸川・隅田川付近に到っても、秩父氏の一族である畠山・河越・江戸氏らは態度を明確にしませんでした。頼朝は、荒川下流の足立氏・豊島氏・葛西氏らを使って、頼朝への帰属を促します。

中でも、江戸重長は「八カ国の大福長者」（義経記）と云われるほどの実力者で、衣笠城攻撃に加わっていることから江戸川・隅田川の渡河を拒む気配を示していました。頼朝は重長と同族の葛西清重に、清重の所領安堵、江戸重長の殺戮を命じます。ここで清重の武蔵武士の本領が発揮されます。吾妻鏡では長くなるので、渡辺世祐氏の「武蔵武士」から引用します。

『恩賞によりて所領を増し庄園を加ふるは、固より臣の喜ぶ所なり、されど所領を得んことを望むは、一族縁者を養はんが為めなり。今一族重長の所領を没収して臣に給はらんとするは、もとより臣の素志に違ふ所なり。身は旧領にて足りぬべし、重長若し僻事あらば他人に賜ふべし』と堅く之を拒みぬ。頼朝大に怒りて汝にして命を奉ぜざれば、汝の所領をも併せて没収すべしと、嚴命秋霜烈日の如し。清重敢て恐るる色なく従容として答へらく、『臣若し、この事によりて罰せらるれば、運の極りなり、もとより力の及ばざる所なり、士は高潔を尊ぶ、荷くも受くべからざるものを受くるは義にあらず、争でか所領を給はるべき』と詩を尽し、道理を述べぬ。理非に明なる頼朝は、大に清重の詞に感じ、其心操を尊び重長の罪を許して所領を安堵せり。・・・』

この結果、江戸重長も説得に応じ、頼朝は渡河に成功しました。以後、有力武士団も頼朝に従っています。恐らく、この段階で村山党の面々も頼朝に服属したと考えられます。頼朝はこれらの勢力を従えて、10月5日頃、武蔵野国府に入り、江戸重長に武蔵総検校職を命じ、畠山重忠を先頭にして6日、鎌倉に入ります。

鎌倉に入って12月14日、武蔵の武士団は

『武蔵国住人、多く以て本知行の地主職、もとの如く執行すべき』

と頼朝から本領を安堵されました。しかし、落ち着く間もなく合戦は続きます。平氏は頼朝追討の後白河法皇の宣旨をもって、関東へと兵を向けます。

富士川の戦いを経て、1184（寿永3）年1月26日、後白河法皇は頼朝に平氏追討の宣旨を下します。

軍記物の世界になりますが、2月6日～7日の福原の合戦は武蔵武士の奮闘ぶりと功名を伝えます。

- ・熊谷直実と平山季重（西党）が一ノ谷の西門で先陣を争った場面
- ・鶴越の坂落し
- ・17歳の平敦盛を討った熊谷直実

などなど。2月7日、範頼、義経軍が摂津国一の谷で平家を破りますが、この合戦に山口一族は義経に従っています（源平盛衰記）。

1185（文治元）年2月19日、義経が屋島で平家を破り、3月24日、壇ノ浦で平家を亡ぼします。

（2）上洛・北条氏のもとに

1190（建久元）年11月7日、頼朝は上洛して京都に入ります。この時の先陣として、山口小七郎（＝家継）・仙波次郎・山口次郎兵衛尉・金子小太郎、後陣に、金子十郎・仙波平太・山口小次郎らが供奉しています。家継は畠山重忠のあとに並んで二番の随兵でした。この後、鎌倉幕府内で陰惨な肅正が続きます。村山党はその都度、意志決定に抛り所の判断を迫られます。

1199（正治元）年1月13日、頼朝死亡。

1203（建仁3）年9月7日、頼家が出家、鎌倉殿の地位を奪われ伊豆修善寺に流される。

1205（元久2）年6月23日、畠山重忠が武蔵二俣川で小山、和田、三浦の軍勢に討たれる。江戸、川越、横山、金子、児玉などの武蔵武士は討伐側に加わっています。

1213（建保元）年5月、和田義盛の乱 横山党（義盛と姻戚関係）、金子太郎ら金子一族が和田義盛に組みしますが、義盛敗れ北条体制が確立します。

1219（承久元）年1月27日、源実朝（28才）、暗殺され、源氏将軍が終わり、北条泰時が武蔵守に就任します。こうして、武蔵武士は北条氏に従うこととなります。

（3）承久の乱に活躍する村山党

1221（承久3）年5月15日、実朝が公暁に殺害された隙を狙って、後鳥羽上皇が討幕の院宣を出しました。5月19日、鎌倉に乱の内容が伝えられ、政子が大演説をして、武蔵武士は北条氏につくことになりました。5月22日、武蔵武士が京に向かって出発します。

・金子・宮寺・勝呂・山口・仙波・久米など村山党の武士ほとんどが北条方として参戦しました。和田合戦の家名挽回ともされます。

東村山市史は次のように伝えます。

『この合戦のなかで、村山党が近江国や宇治川の合戦で活躍したことが『承久記』などに記されている。まず『承久兵乱記』には上洛する御家人として「かねこの十郎」がおり、『承久記』には、東海道を上洛する幕府軍の「二陣武蔵守泰時」の軍勢のなかに「金子平次」「金子党」がいた。そして、近江国勢多橋の合戦では、相模守時房の軍勢のなかに「村山党八人」がおり、三番手で瀬田川にかかる勢多橋を渡ろうとしたが、一・二番手と同じく「桁を渡りけるが、其も余に強く被射て引退」している。四番手二〇人余の中には村山党の一族の久目（米）左近家時もいた。さらに、宇治川の合戦では、川を馬で渡ろうとした御家人のなかに「金子与一小太郎、大倉六郎」がいたが、「打連く渡しけるが、助かる者少なく、流者多かりけり」という状況であった。また、「宮寺三郎・須黒右馬允」も宇治川の合戦で負傷している。

以上のような村山党一族の奮戦を物語るように、この合戦による論功行賞を行うために提出された交名のなかには一族の名前が散見している。まず、「敵を討った人々」として「金子大倉太郎」がおり、宇治川の合戦で「手負いの人々」のなかに「山口兵衛太郎・須黒兵衛太郎」と「仙波太郎・同左衛門尉」の四人が見え、さらに同じ合戦で川を越えようとして死亡した人々として「金子大倉六郎」と「金子小太郎」、そして「疵を被り、三箇日已後死」んだ者として「仙波弥次郎」が記されている。

これらの史料を参考にすると、この承久の乱には金子・宮寺・須黒・山口・仙波・久目（米）など、村山党のほとんどの一族が参加し、死を覚悟で活躍していることがわかる。・・・「和田合戦の際の打撃を回復し家名を挽回しようとして奮戦」したに相違ない。』（東村山市史上 p 384）

（4）消息が消える村山党

活躍した村山党の面々も、北条氏の幕府支配が強まり、武蔵の統制が強まると、村山党ばかりで

なく、武蔵武士の消息は途絶え勝ちになります。建武2年(1335)になると、僅かに金子氏が射手として名を記される程度になっています。武蔵武士は次の時代へと新たな展開を求められて来ました。

3 義経に娘を嫁がせた河越氏（武蔵武士の盛衰と悲劇）

河越氏は秩父氏の一族の中でも、東大和に近い位置にあった武士団で、山口氏とも密接な関係をもっていました。代々武蔵留守所総検校職を世襲し、非常に力のある武士団ですが、身内から義経に正妻を出したばかりに、塗炭の苦しみをします。時代のエピソードとして紹介します。

(1) 留守所総検校職

河越氏の館は現在の川越市から西に寄った上戸の常楽寺とその周辺に設けられました。12世紀中頃のことと考えられています。東に人間川、西には鎌倉街道・東山道武蔵路があり、人間川は広域の水運に利用され、東山道武蔵路を南下すれば武蔵国府に達し、物流と往来の上で実に好都合の場所です。

また、館跡の南には、霞ヶ関遺跡が発掘されていて、入間郡衙として古代の政治の中心地であった可能性が高いともされます。留守所惣検校職として国衙機能を掌握する上で、それらを視野に据えて、この地を選んだとも考えられます。



川越市上戸の常楽寺に残る河越氏館跡

平治の乱を経て、永暦元年(1160)、武蔵守は平知盛となり、頼朝の武蔵入りまで20余年間にわたって武蔵国は平氏の支配下にありました。この間に、後白河院の創建した新日吉社に所領を寄進して、河越荘を立荘して、基盤の安定化を図っています。



上戸には新日吉社に所領を寄進したことから「日枝神社」が勧請されて祀られています。

(2) 娘の結婚、領地の没収

河越氏は、重頼・重房父子が寿永3年（1184）源義経に従って木曾義仲軍を宇治に破りました。また、同年、2月、河越重頼、重房は義経に従い平家追討をします。さらに、重頼の妻が頼家の乳母として伺候していることから、頼朝の信任厚く、頼朝の媒酌で義経の正妻として娘を嫁がせました。

- ・ 1185（文治元）年3月24日、義経が壇ノ浦で平家を亡ぼしますが、4月には頼朝と対立関係になり、4月29日、頼朝が西国に義経への不服従を命令しています。
- ・ 同年10月23日、河越重房が勝長寿院落成式供奉の行列から省かれます。重房の妹が義経の正室である事による縁座でした。
- ・ 10月24日、勝長寿院落成式の式後、頼朝が義経討伐を告げます。下河辺政義が重頼の婿の故に所領が没収されています。
- ・ 11月12日、頼朝は河越重頼の所領を収公し、伊勢五箇郷を大井春実他に与えます。ただし、河越荘などそのほかの領地は、後白河法皇への配慮もあったのか、重頼の老母に預けられています。さらに、重頼の留守所惣検校職は没収されました。このため、その職は文治4年まで空白になります。
- ・ 嘉禄2年（1226）重頼の三男重員が武蔵留守所総検校職に任ぜられます。
- ・ 建長3年（1251）重員から嫡子重資が武蔵留守所総検校職受け継ぎ、秩父一族の嫡流として勢力を挽回しました。



川越市内 養寿院にある河越氏の墓

4 仏蔵院の焼き討ち伝承

山口貯水池の湖底に沈んだ村に「勝楽寺村」があり、仏蔵院がありました。この寺に、時の住職が北条氏を調伏祈願をしたため、全山焼き討ちにあったとする伝承があります。現仏蔵院が所蔵する「往讓旧録」から紹介します。

(1) 頼朝の武運祈願

○治承・寿永ノ頃二至りて源頼朝公平家追罰御武蓮榮久の御所願伊豆箱根両社ヲ初東國の神社佛閣二所り給ふて、當山の権現にも所り給ふなれハ、寺僧抽丹誠所りし奇瑞ありしより、御所願所の蒙命を御朱印を頂戴采地を給わりしより、園中の寺院坊中を連しハ

北蓮寺・弁天院・勝般寺・永源寺・地藏院・阿彌陀寺・彌勒院・寿明院・経萬院・薬師寺

大彌堂・清照寺十二院、又向坊・年良坊・眞伝坊・高麗坊・東ノ坊・外之坊・長命坊・神門坊
清水房・天狗坊大九房・中代坊
軒ヲ並て繁榮ノ山と成り、將軍家六代祈祷無怠慢修行す

(2) 北条氏調伏祈願により全山焼き討ち

○宗尊親王將軍の時執権北條一家調伏の御意願鎌倉御所には松殿僧正を初メ貴僧集り、當山ハ寛明僧正神前二て七日修行、北條家二聞出シ親王京都ニ逃登給ひ、松殿僧正貴僧方逃去り、或ハ捕れ囚屋入り、當山へハ五百余騎の軍勢來り俄に火を掛焼払れ、三十余院の堂舎・佛紳一字も残らず焼亡の中二藏王権現そそけなく灰中残り給ひ今に尊藏ニ炎火当有と云、牛王ノ祈板は西山稻荷社残り、生茂りし楠一葉も色を変つ青々と盛木残りを上ノ山彌堂ニ入ル、延久の鐘は◎櫻ヨリ焼落響碎て音を止め、如來ハ山を越口北山ニ座し給ふ、高租開關成給ふより七百猶余年ニして一朝の煙と失けり、是執権の積
勝樂寺村から所沢市山口に移転した仏藏院
悪、佳僧寛明藤澤遊行寺ニ忍入、又大山の辺に一寺を建立し勝樂寺とて今に有り此寺号東國に三ヶ所有シ因縁ヲ記ス、此動乱ニ断絶し野山となりしと云



(3) 応永の繁栄

応永の頃は東國は鎌倉公方家の領國にして當國者管領上杉の住國となり、漸田畑開發シ土民も住に至り、上山の大彌堂を崩して一寺を建ルにニ、高麗口より人多來りて助造れり、是を勝般寺ト號ス今開山の地名なり、又楠の平ニ祠建藏王権現を遷宮シ左右六所を勧請す、又北山の瑠璃佛を安置シ北蓮寺ト號ス、又神門ニ弁才天殘シを祭り一寺を建て永源寺と號し、又地藏院を建て六地藏を納メ五院ニ社建立、供養札ニ応永廿五戊戌九月吉辰藏王権

5 鎌倉街道の様子

狭山丘陵の東端を鎌倉街道上ッ道が通っていました。中世の人と物と情報が通り抜け、様々に伝承を残しています。

(1) 日蓮の久米川宿

鎌倉街道にはいくつかの宿場がありました。東村山市域にもあり、文永8年(1271)、日蓮が佐渡へ流される途中でしたための次の手紙によって「久米川宿」の名が確認できます。これが久米川宿の名が出る最初とされます。

今月十月十日也、起相州愛甲郡依智郷付武藏国久米河宿、經て十二日、付越後国寺泊津、自此互大海、欲至佐渡国、順風不定、不知其期、道間事、心莫及又不及筆(中略)、

(文永八年)

十月二十二日酉時

日蓮(花押)

(富木常忍)

土木殿

このことについて東村山市史は次のように伝えます。

『日蓮は、文永五年(一二六八)モンゴルの牒状が到来すると、執権北条時宗や幕府に信任の厚かった禅僧蘭溪道隆に書状を送って、他宗を排して法華經の功德で日本を守らなければ外敵に滅ぼされると幕府の外交政策を厳しく批判したため、文永八年に捕らえられてしまった。

その後、相模国愛甲郡依智郷(現在の神奈川県厚木市内)一帯に勢力を振るっていた本間氏に預けられていたが、十月十日に配流地佐渡へ向けて出発した。その途中、「武蔵国久米河宿」(久米川宿)に宿泊したことが記されている。ここで重要なのは、久米河「宿」と明記されていることで、ここから少なくとも日蓮の目から見て、当時の久米川が「宿駅」としての機能と施設を備えていたことがわかるのである。



日蓮の泊まった宿駅の主人は信仰心があり、日蓮を厚遇したといわれている(「本化仏頭仏祖統記」)。これに関連して、市内久米川町五丁目の立川家には日蓮が宿泊したのは同家であるといい伝えており、古い日蓮像が伝わっている。』(東村山市史上 p 398)

(2) 道興の久米川宿

文明 18 年(1486) 聖護院門跡の道興准后が、修験道の普及を含めて関東を遊覧しました。10 月に小田原・箱根・大山寺などを廻って、鎌倉街道を小野路・霞の関(関戸)・恋ヶ窪・堀兼の井と辿って入間川に赴いています。

道興は武州大塚(川越市内)の十王という山伏の坊を仮り住居として、河越・勝呂(坂戸町)・野火止(新座市)などに次いで、年の暮には野老沢(所沢市)と久米川を訪れました。その時の状況を「廻国雑記」に次の通り残しています。

『ところ沢といへる所へ遊覧にまかりけるに、福泉といふ山伏、観音寺にてささえ(竹筒)をとり出しけるに、薯預(ところのいも)といへる物さかなに有けるを見て、誹諧、

野遊のさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老沢かな

この所を過てくめくめ川といふ所侍り。里の家々には井なども侍らで、ただこの河をくみて朝夕もちひ侍となん申ければ、

里人のくめくめ川とゆふくれに成なは水はこほりもそする 』

15 世紀に、鎌倉街道が機能し、宿といっても井戸もなく、久米川の水を生活水にしている状況が浮かびます。

(3) とわずがたりの武蔵野

正応 3 年(1290)秋、後深草院二条が鎌倉を経て武蔵野に旅します。浅草観音にお参りして、堀兼

の井を廻ります。その時の様子を紹介します。

『浅草観音堂参詣』

武蔵の国には浅草という堂があって、十一面観音がおわします。霊仏との聞えがあるので心惹かれて参ったが、その浅草までの道というのは、野の中をはるばると分けて行くのに、萩・女郎花・萩・芒のほかには混り生うる草もなく、しかもそれらの高さは馬に乗った男の姿も隠れて見えないほどである。その光景は想像できよう。その草原が三日も続いたろうか、分け行くが野は尽きることもない。少し横へ行く道には宿場などもあるのだが、はるばる私のたどる道一筋は、過ぎた方も行く先もただ一面の野原である。・・・

堀兼の井という歌枕は、今は跡もなく、ただ枯れた木が一本残っているばかりである。ここからさらに陸奥のほうまでも行きたいとは思ったが、恋路の果てのこのさすらいの旅には、関守までもたやすく通してはくれぬ憂き世のこと、かえってそれがかいもないことだと思い返して、また都のほうへ帰り上ろうと思って、鎌倉へ戻る。』（富倉徳次郎氏による現代語訳）

（４）東大和市の鎌倉街道

どこのまちへ行っても、一つや二つの鎌倉街道に出会います。どこかで主要な鎌倉街道につながってあれば古老はそのように呼んだようです。まして、丘陵の東端を鎌倉街道上ッ道が通っていて、周辺に古戦場や何らかの言い伝えがあるだけに、東大和市周辺では、それらにつながる道は多かれ少なかれ鎌倉街道の名が付けられました。

東大和市では、奈良橋の八幡神社の東側を通る道が鎌倉街道と伝わります。湖底のかつての村、内堀（鎌倉権五郎景正の伝承がある）から小手指河原古戦場に向かう道です。それは、新田義貞が粥を炊いて腹ごしらえをしたと伝えられる場所でもあります。

八幡神社から南は東村山市の金山神社の方へ抜けて鎌倉街道上ッ道（現在の府中街道）へ連絡しました。また、第八小学校の横を通って東大和方面に抜けた道もあったと云われます。さらに、古い板碑の出土状況から、丘陵の裾野を東西に結ぶ鎌倉街道もあったのではないかとする考えもあります。



IV 新田義貞が「こさ池」で粥を炊いた？

一挙に鎌倉幕府滅亡まで話が飛びますが、その間の出来事を年表で追います。

◎頼朝を初代とする源家三代の跡を狙う北条氏は武蔵国を重要な後背地として、早くから身内の有力者を国府の中枢に送ります。

1199（正治元）年 1月 13日、頼朝死亡。1月 26日、18才の頼家が家督を継承する。

1199（正治元）年 4月 12日、北条時政など 13人の元老合議制成立。

1203（建仁 3）年 9月 2日、比企能員が時政の自宅で謀殺され、北条一族と畠山、三浦、和田などの御家人が比企ガ谷ツを攻撃、**比企氏全滅**。



シヤガが咲く比企氏の墓(鎌倉妙本寺)

1203（建仁 3）年 9月 7日、頼家が鎌倉殿の地位を奪われ伊豆修善寺に流される。

1203（建仁 3）年 9月 10日、実朝が将軍に着くため、北条時政の館に移る。

1203（建仁 3）年 10月 3日、**北条時政は武蔵国務職に任じられ、武蔵国衙の行政権を掌握**。

◎北条氏の政権獲得が進み、北条氏の一族が武蔵の守の位置に付きます。そして、頼朝股肱の武士を切り捨て、武蔵の開発が進められます。

1205（元久 2）年 6月 22日、**畠山重保が由比の浜で三浦義村に討たれる**。6月 23日、畠山重忠が武蔵二俣川で小山、和田、三浦の軍勢に討たれる。江戸、川越、横山、金子、児玉などの武蔵武士は討伐側に加わる。その夜、畠山事件は稲城重成の陰謀事件として、稲城一族は滅ぼされる。



事件の発端となった重保の供養塔は由比から八幡宮を結ぶ第一鳥居の近くにある

1213（建保元）年 5月、**和田合戦**。北条氏と和田義盛方の戦い。横山党（義盛と姻戚関係）、金

子太郎ら金子一族が和田義盛に組みする。義盛敗れ、相模・南武蔵の領主が北条氏系に変わる。北条体制が確立する。



和田塚の上は荒れ果てている

- 1219 (承久元) 年 1 月 27 日、源実朝 (28 才)、暗殺される。源氏将軍、ここに終わる。
- 1221 (承久 3) 年 5 月 15 日、承久の乱 (後鳥羽上皇が討幕の院宣を出す)
政子大演説、武蔵武士が北条氏につく。5 月 22 日、武蔵武士出発
金子・宮寺・勝呂・山口・仙波・久米など村山党の武士ほとんどが北条方として参戦した。
和田合戦の家名挽回ともされる。
- 1239 (延応元) 年 2 月、北条泰時、武蔵国小机郷烏山の荒野の開発を命ずる。
- 1241 (仁治 2) 年 北条泰時が武蔵野に水田を開くことを定める
- 1241 (仁治 2) 年 12 月 24 日、多摩川の堰上げを行う (箇所不明)
- 1247 (宝治元) 年 6 月 5 日、**宝治合戦**=最後の御家人三浦氏が北条氏、足達氏と戦い、滅ぶ。
三浦光村は 80 騎で永福寺に籠もる。敗れて**三浦一族**、頼朝の法華堂に集まって自害、吾妻鏡は自害した人 500 余人、内、将軍御所に出仕する資格を持つ番衆が 260 人含まれていたという。



頼朝の墓から下ると法華堂のあった辺りは、明るくなって白旗が立っている。

- 1285 (弘安 8) 年 11 月 17 日、安達泰盛を主人公とする**霜月騒動**が起こる。御家人勢力の代表安達泰盛、北条貞時の臣平頼綱にうたれる。**安達氏滅亡**。

◎北条氏を苦しめる外圧が生じました。

- 1268 (文永 5) 年 1 月 18 日、蒙古帝国皇帝クビライから、蒙古への服属と朝貢を求められる。
- 1274 (文永 11) 年 10 月 5 日、対馬に蒙古来襲 総数 4 万人近い大軍

◎対外危機を乗り切ったかのようにですが、国内では反北条の動きが強まります。

1331（元弘元）年8月、後醍醐天皇神器を持って笠置山へ。倒幕の動き⇒元弘の変。

1332（元弘2）年3月、幕府、後醍醐天皇を隠岐に流す。

1333（元弘3）年2月5日、楠木正成・千早城の戦い。武蔵武士は幕府軍として攻撃。

1333（元弘3）年5月8日、新田義貞新田庄生品神社で挙兵、鎌倉街道を南下、20万余騎。

このような経過を経て、鎌倉幕府は崩壊します。その当初の動きを伝える史跡が、狭山丘陵周辺には色濃く残されています。これらの歴史が展開した舞台である村の様子から紹介します。

1 村の様子

華やかに描かれる太平記の叙述に反して、中世の村の存在は不確かです。現在のところ、狭山丘陵周辺では面的な遺跡は皆無で点でしか発見されていません。

（1）自然発生的な集落、散村

「石井進 中世の村を歩く」（朝日選書 648p46~47）に現在の岡山県新見市にあった備中国新見荘の平安時代から江戸時代の村の様子がイラストで描かれています。谷ツに成立した村で、東大和周辺を理解する一つの資料として紹介します。

狭山丘陵周辺で発見されている10世紀から11世紀にかけて、集落があったと考えられる箇所は東村山市史5資料編考古p701に記されています。

（2）境堀

最近の研究で、中世の村の成立に関して注目すべきは、丘陵に展開する「境堀」についてです。東大和市周辺では、所沢市の「お伊勢山」・「椿峰」、武蔵村山市の「岸」地域にその存在が考えられています。

所沢市「お伊勢山」・「椿峰」

東村山市史は次のように記しています。

『一方、丘陵の居住地が裾部に移ることは、もう一つ大きな意義をもってくる。それは狭山丘陵の畑作に好適な丘陵頂部や斜面部が居住地から開放されたことは、中世に入って、より積極的に畑地の開発が進められる条件を整えたことになる。事実、お伊勢山遺跡では、中世に入ると、丘陵斜面部に開発の手が入り、中世後半から近世初頭には、丘陵の植生を一変させるほどの変化が生じているという。そこでは、丘陵の利である水田や畑作、それに木材や薪など多様な生産を開始していたことがうかがえる。また、橋口定志氏が八王子市の宇津木遺跡ではじめて確認し、所沢市の椿峰遺跡群で注目した中世の「境堀」も、丘陵の多様な生産地を囲い込む区画として注目される(図586)。

こうした断片的な資料からうかがえることは、狭山丘陵の開発は、中世をとおして活発に進められ、その末期には、開発がほぼ完了していたことになる。つまり図588の近世の狭山丘陵の水田も、実は、その多くが中世に耕作が開始されていたと想定して、大きな間違いはないものと思う。そして、近世の新田開発が狭山丘陵から武蔵野台地へと移り、「切添」と呼ばれる開発形態をとったのも、丘陵での開発がある程度完了したことにほかならない。それは中世にさかのぼることが確実な寺社が、水田を背後にひかえた丘陵に広く展開し、在地領主である中小の武士団が狭山丘陵を活躍の舞台としたことから明らかである。』（東村山市史5 資料編考古p877）

武蔵村山市「岸」

武蔵村山市史は次のように記しています。

『武蔵村山市域の尾引山や猿久保の周辺では、中世初期の農民が谷の奥いわゆる「谷戸」を開発するときにその範囲を囲い込む「境堀」と言われる遺構のようなものが古代・中世部会の渡辺浩史による踏査の結果確認されている。

「境堀」に関しては、考古部会の橋口定志による詳細な研究がある(「中世東国の居館とその周辺一南関東におけるいくつかの発掘調査事例から一」『日本史研究』三三〇)。それによると、「境堀」は12世紀後半(平安時代末)以降に出現し、13・14世紀を主要展開期として、15～16世紀の早い段階まで機能していたということである。

また、前面に川ないしは湧水をともなう谷があり、「境堀」に接して塚などの墓域が存在し、その内部には居住施設・墓域・水田・畠・山林までも囲い込んでおり、山林の用益までも含めた農業経営の単位であるということである。

渡辺によれば武蔵村山市域では、岸の「神明入り」をぐるりと囲む形で「境堀」が掘られていたと考えられ、またこの「境堀」に囲まれた内側こそが、中世初期に武蔵村山市域に生活をしてきた農民たちの開発した、まさにその遺構と考えることができるという見解を示している。つまり、この遺構が「境堀」であるならば武蔵村山市域に居住していた中世初期の農民の生活の痕跡を具体的に明らかにすることができる、大変貴重な資料ということである。渡辺の言う「境堀」そのものが、中世遺構であるかどうかは別として、事実、岸の西谷戸には湿地帯が広がり、かつては水田であった。

このように岸の谷戸が中世期に開発されたものであると考えていくなかで注目されるのが、谷戸の奥に位置する須賀神社奥の院である。』(武蔵村山市史上 p 589)

2 たび重なる戦乱

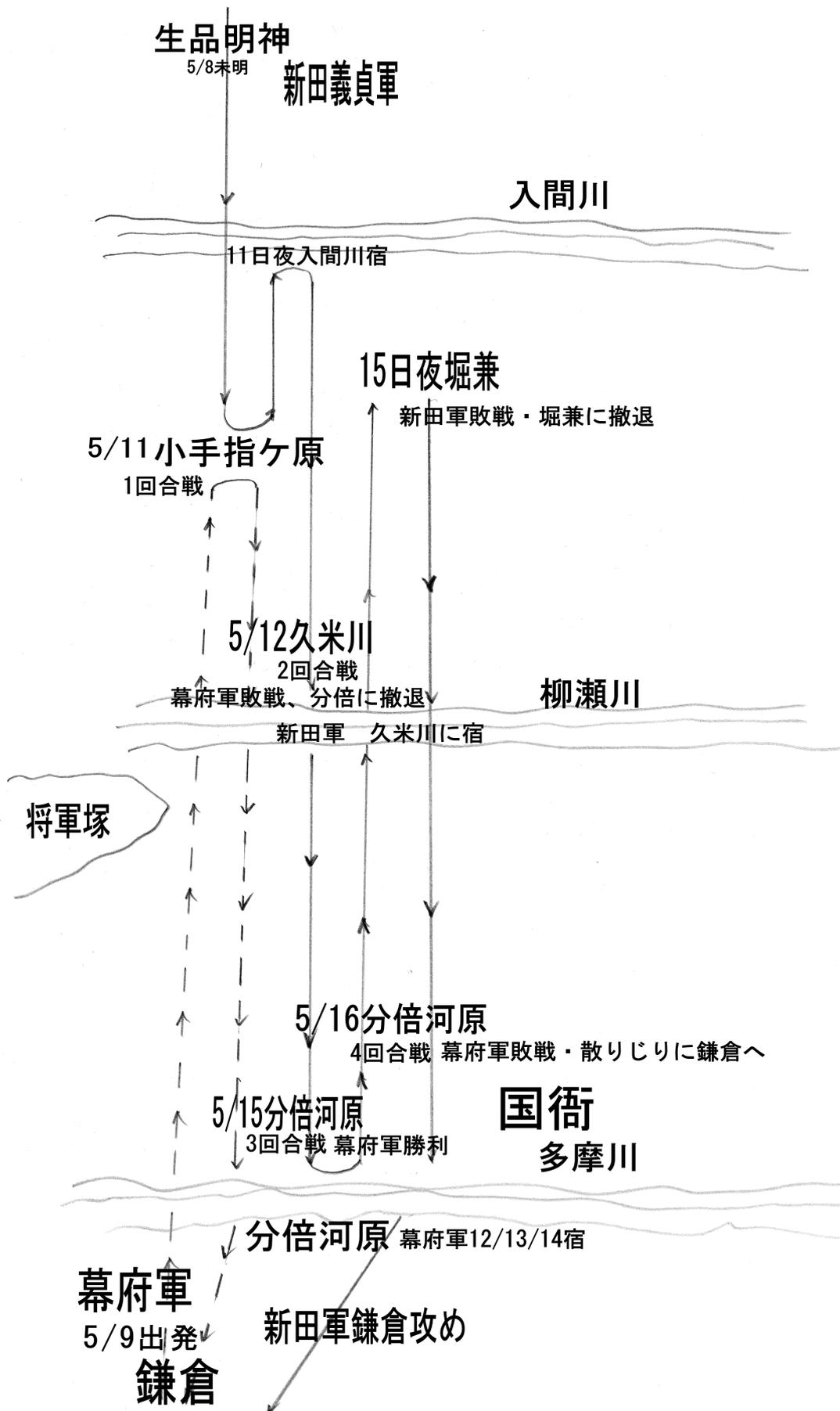
100年続いた北条氏による鎌倉幕府体制は1300年代にはいと、地方からも中央からも改革を迫られます。各地で蠢動が起き、武蔵国でそのさきがけとなったのが新田義貞の行動でした。

(1) 新田義貞の鎌倉攻め

元弘3年5月8日未明、新田義貞は上野国の生品明神(群馬県太田市)に一族150余騎を集め、後醍醐天皇からの討幕の綸旨を読みあげて、一路鎌倉を目ざしました。太平記によれば、大館、堀口、岩松、里見、脇屋、江田、桜井などの名が見えます。利根川を渡り、鎌倉街道上道を南下、上野、下野、上総、常陸の武士とともに、江戸、豊島、葛西、河越らの武蔵武士が加わり、20万余騎に達したとされます。

これを聞いた幕府軍は、5月10日、金沢貞将(さだまさ)に上総、下総の軍勢を率いさせて下河辺方面(埼玉県東部)に向かわせ、新田軍の背後を突かせました。また、桜田貞国に御内人長崎高重、加治家貞とともに武蔵、上野の軍勢を率いて鎌倉街道を北上させ、入間川に向かいました。

太平記は、「武蔵・上野両国ノ勢六万余騎ヲ相副テ、上路ヨリ入間河ヘ向ラル。是ハ水沢ヲ前二当テ敵ノ渡サン処ヲ討ト也。」(太平記)という作戦で、幕府側が入間川(狭山市入間川)で新田軍を防ごうというものでした。以下、太平記(山崎正和訳)によって戦いの経過を紹介します。



一回戦 小手指ヶ原の合戦

元弘3年5月11日朝、幕府軍が入間川に迫ろうとした頃、新田軍はすでに川を渡って小手指ヶ原(所沢市)に現れ、両軍はここで激突しました。

『初めは射手を並べて激しく矢合戦をしたが、まえは馬の足場に恰好の地形であり、いずれも東国育ちの荒武士どもであるから、どうしてそのまま我慢できよう。両軍ともに太刀・長刀の鋒を並べ、馬を揃えて一気に斬りこんだ。二百騎三百騎、さらに千騎二千騎とくり出して、相戦うこと三十余度に及ぶと、義貞の陣営では三百余騎が討たれ、鎌倉勢では五百余騎の討死を数えた。』

そこでその日はすでに暮れ、人も馬も疲れ果てたので、合戦の続きは明日と約束しあい、義貞は三里ひきさがって入間川のほとりに陣を取り、鎌倉勢も三里退いて久米川のほとりに陣を取った。両陣たがいに隔たるところは三十余町に足りず、それぞれに今日の合戦を語り合い、人や馬を休ませ、篝火をたいて、夜明けを遅しと待ちかまえていた。』



小手指ヶ原には合戦場として白旗塚が残されている

二回戦 久米川の合戦 將軍塚

5月12日、新田軍は先手を打って攻撃を開始し、久米川に押し寄せました。

『夜が明けきってしまうと、源氏は平家に機先を制せられまいと、馬の足を急がせて久米川の敵陣へ攻め寄せた。平家も、夜が明けたらきっと源氏が攻めて来よう、待ち受けて戦ったら有利であろうと、馬の腹帯を固くし兜の緒をしめて待ち構えていると見えた。』

両陣はたがいにぶつかり合い、鎌倉勢は六万余騎をひとつに合して、陣形を陽に開いて敵をなかに取り囲もうと勇み立った。義貞方の軍勢はこれを見て、陣形を陰に固めてまんなかを破られまいとする。それぞれにかの黄石公の虎を縛る法であり、張子房の鬼をひしぐ術であって、たがいに知りつくした兵法であるから、両陣ともに入り乱れて破られず囲まれず、百戦練磨の命を今日かぎりと思ひ定め、一気に死する覚悟で戦った。

こうして、どちらも千騎が一騎になるとも退くまいと戦ったが、やはりときの運によったのだろうか、源氏は討死少なく平家は多く倒れたので、加治と長崎は二度の合戦に敗北したような気がして、分倍河原めざして退却した。源氏方は引き続き攻め寄せようとしたが、連日数度の合戦で人も馬もひどく疲労していたから、一夜馬の足を休め、陣を久米川まで進めて、夜の明けるのを待っていた。

そのころ、桜田・加治・長崎らの大手が十二日の合戦に敗れ退いたことが鎌倉へ伝わったから、

相模入道高時は弟の四郎左近大夫入道恵性を大將軍とし、塩田陸奥入道・安保左衛門入道・城越後守・長崎駿河守時光・左藤左衛門入道・安東左衛門尉高貞・横溝五郎入道・南部孫二郎・新開左衛門入道・三浦若狭五郎氏明をつけて、ふたたび十万余騎を援軍にさし向けられた。この軍勢は十四日の夜半ごろに分倍河原に着いたので、この陣にいた敗軍の兵どももふたたび力を得て勇み立とうとした。』



久米川一帯は住宅地かが進み狭山丘陵を背に久米川古戦場の碑が建てられている

三回戦 分倍河原の合戦

5月15日、補強を知らない新田軍は15日未明、分倍に押し寄せます。しかし、敗れて、堀兼(狭山市)まで退却します。

『義貞は敵に新手の大軍勢が加わったとは思ってもよらず、十五日の未明に、分倍河原へ押し寄せてどっと鬨の声をあげた。鎌倉勢は、まず秀れた射手三千人を送り出して前面に押し出し、雨の降るように激しく射かけさせたので、源氏方は射すくめられて駆けまわることできない。平家方はこれで有利な立場となり、義貞の軍勢を取り囲みひとり残らず討ち取れとばかり攻め立てた。

義貞は特に勇猛な兵を選びすぐって、敵の大軍を駆け破っては背後へ通り抜け、ひきもどっては叫び声をあげて敵中へ駆け入り、稲妻がきらめくように、蜘蛛手・輪違の形で、七、八度ほど敵に当たった。しかし敵は大軍でしかも新手であり、さきの恥辱をそそごとと忠義ひと筋に闘うので、義貞もついに敗れて堀金へと撤退した。その軍勢は多く討たれ、重傷を負う者は数知れなかった。

その日そのまま追撃していたなら、義貞もここで討死されるころだったが、鎌倉勢はもはや敵も何ほどのことがあろう、敗残の新田はきっと武蔵・上野の者どもが討ち取って差し出すだろうと、いいかげんに他人をあてにしてときをすごした。まったくこういうところが、平家一門・北条の運命がつきてしまった顕われであった。』

その夜、意気消沈する義貞の元へ、三浦大多和が加勢に馳せ参じます。

『こうなつては、義貞も手のうちようがない思いをされていたところへ、まえまえから義貞に心を寄せていた三浦大多和平六左衛門義勝が、相模国の軍勢、松田・河村・土肥・土屋・本間・渋谷を引きつれ、その数六千余騎で十五日の夕刻に義貞の軍陣へ馳せ参じた。

義貞は大変喜んで急いで対面をされ、礼厚くもてなし、座を近づけて合戦についての意見を尋ねられた。平六左衛門は畏まって、

「いまは天下がふたつに割れて、たがいに己れの存亡を合戦にかけているのですから、その勝ち負けが十度も二十度も入れ換わるのは当然のことでありましょう。ただし最終的な落着は天の命ずる

ところに決するのですから、ついには太平の世になることは、これまた何の疑いがありましよう。御手勢にこの義勝の軍勢を合体するとその勢は十万余騎、なお敵の軍勢に及ばないとはいえ、これでもう一度合戦を挑んでひと勝負しないという法がありましようか」

と言上したが、義貞は躊躇（ためら）われて、「それもそうだが、味方の疲れ果てた兵をもって、勝ち誇った大敵に攻めかかるのはどんなものだろう」と、おっしゃっているのです、義勝はさらに言葉を重ねて意見を具申した。』

鎌倉方は本日の勝利に酔いしれている。きっと油断している。お情勢を分析して

『何はともあれ明日の合戦では、義勝が新手のことゆえ一方の先鋒を承わって、敵と一戦交えてみましよう』これを聞いて義貞は心から納得し、その言に従って、今度の合戦の作戦をすべて三浦平六左衛門にまかされた。』



かつて水田の中にあった古戦場碑も小さな公園の隅で問いかけを待っているようです。

四回戦 分倍河原の合戦

5月16日、未明、新田方が分倍河原を急襲しました。

『明ければ五月十六日、午前四時、三浦勢四万余騎がまさきに進んで分倍河原へ押し寄せた。敵陣近くなるまでわざと旗もあげず、鬨の声もあげなかったがこれは敵を出し抜いてひと息に勝負を決するためであった。』

思ったとおり敵軍は前日の数度にわたる合戦で、人も馬もみな疲れ果てていた。そのうえ、まさかいまごろ敵が攻めて来ようとは思ひもかけなかったから、馬には鞍も置かず甲冑も調べておかず、ある者は遊女と枕を並べて帯紐解いて横たわり、またある者は酒宴の酔に誘われて前後不覚に寝こんでいた。前世の所業に報いを受けた者どもが、自滅の道をたどるとはまさにこのことかと思われる惨めさであった。

このとき、寄せ手が近づくのをみつけて、多摩の河原に面して陣取っていた兵たちが、「ただいま正面から、旗を巻いた大軍が静かに馬を進めて来ました。もしや敵勢かもしれません。御用心のほどを」

と知らせたところ、大将を初めとして、一同少しも驚かず、「なに、そういうこともあろう。三浦大多和が相模国の軍勢を集めて、味方へ馳せ参ずるとのことだから、きっとそれがやって来たのだと思われる。まったくこんなめでたいことはない」

というばかり。じっさい、運命がつきるときとはこのようにあきれたことが起るものなのである。

そのうちに、義貞も三浦勢の先陣に追いついて、十万余騎の軍勢を三隊に分けて、三方から押し

寄せ同時に鬨の声をあげた。入道恵性はこの鬨の聲に驚いて、
「馬だ、甲冑だ」

とあわてふためくところへ、義貞・義助の軍勢が縦横無尽に攻めこんだ。

三浦平六はこれに力を得て、江戸・豊嶋・葛西・河越、それに坂東八平氏と武蔵七党の兵どもを七つの隊に分ち、蜘蛛手・輪違・十文字の陣形でひとりも討ち洩らさじと攻めかかった。入道恵性の軍勢は大軍のくせに三浦の一時の策略に打ち破られて、逃げ行く者は散りぢり鎌倉へ退却し、討たれた者も数知れなかった。』

「太平記の大ボラ吹き」の例えがあるように、実際にこのような展開が行われたかどうかは定かではありませんが、後に紹介する武蔵に残る板碑がある程度の輪郭を補ってくれます。幕府軍が 13、14、15 日を分倍にこだわったのは、国衙が府中にあり、その守護も必要であったのでしょう。

以上の経過を経て

- ・ 5 月 18 日～22 日 極楽寺切り通し、巨袋坂、化粧坂の三方で合戦
- ・ 5 月 22 日、執権北条高時以下、東勝寺に集まって自刃、新田軍が鎌倉を陥し、**鎌倉幕府は滅亡**します。

北条氏得宗体制から新田義貞鎌倉攻め、鎌倉幕府倒壊の経過を追ってきました。この間、東大和周辺の武士団、特に、東大和市域を治めた主がどのような対応に迫られたのか、想像しただけで胃が痛みます。

また、第四戦で、北条氏に滅ぼされた三浦氏の末裔が新田軍に加勢し、武蔵総検校職を解かれた江戸、豊島、葛西、河越、坂東の八平氏、様々に翻弄された武蔵の七党が加わって、一挙に戦況が決した状況を見ると、この時代の歴史の呻きが聞こえるようです。それは、複雑な要素を含みながら、北条氏が得宗体制を確立する過程で粛正された武蔵武士の勢力が、最後に得宗体制を解消する過程でありました。

(2) 二つの元弘の板碑

新田義貞の鎌倉攻めに関して、太平記は語り口豊富に戦況を語りますが、実際にどのようなことであったのか文書類は残されていません。確実な資料として二つの貴重な板碑(両者共に国指定重要文化財)が残されています。

元弘の板碑

「元弘の板碑」と呼ばれる板碑が徳蔵寺(東村山市)に保存されています。かつては、狭山丘陵東端に位置する八国山の將軍塚の前にあった永春庵たてられていました。丁度、入間・多摩の郡境にあたり、すぐ近くを鎌倉街道上道が通っています。板碑の銘文は

飽間斎藤三郎藤原盛貞生年廿六
勸進玖阿□□仏

於武州府中五月十五日令打死

元弘三年癸酉五月十五日 啓白

同孫七家行廿三同死飽間孫三郎
執筆遍阿弥陀仏

宗長三五於相州村岡十八日討死



とあります。新田義貞軍に加わった上野国の飽間(秋間)一族で、三郎盛貞・孫七家行が小手指ヶ原合戦の後、15日の府中分倍で戦死した。孫三郎宗長が18日の相州村岡で戦死したことを示し、供養のため、玖阿弥陀仏(久米長久寺開山)が勧進し、遍阿弥陀仏が銘文を記し建立した、とするものです。東村山市史は次のように記します。

『碑に記される飽間斎藤氏は、上野国碓氷郡飽間郷を拠点とする御家人東村山地域とどのような関係をもっていたかは明らかでないが、元弘三年(一三三三)正月、楠木正成を攻めるために河内国赤坂の千早城に集結した軍勢について記した「楠木合戦注文」に新田一族とともに飽間一族の名がみられ、新田義貞の挙兵以前から義貞に属して行動していたことがわかる。元弘三年五月八日、生品神社において義貞が兵を挙げ、二十二日に鎌倉を攻略するまで、十二日久米川での布陣、十五日の分倍河原、十八日の相州村岡の合戦と彼らが活躍していることから、新田義貞が時宗の僧侶に建碑させ供養したものとも思われる。またここで注目されるのは、時宗の僧侶が勧進して造立したことが明記されている点である。碑に記される玖阿弥陀仏は、遊行二世他阿真教の弟子九阿弥陀仏と同一人物と想定されるが、このように時宗の僧が合戦には同行して、戦死者を供養していたのだろう。』(東村山市史上 p421)

円照寺の板碑

入間市野田の円照寺には、幕府方について北条氏と運命をともにした武蔵武士である加治家貞に関する板碑が保存されています。全長167センチメートルの板碑には

乾坤無卓孤節地
只喜人空法亦空
癸 道峯
元弘三年五月廿二日
酉 禅門
珍重大元三尺劍
電光影裏析春風

の銘文が刻まれています。無学祖元の「臨劍頌」(りんけんしょう)といわれる漢詩で、入間市史は次のように記しています。

『「乾坤孤節(けんこんこきょう)を卓(た)つるの地なし、只喜ぶ人空にして法もまた空なるを。珍重(ちんちょう)す大元三尺の劍、電光影裏春風を析(さ)く」この偈は禅の究極の境地を示すもので、家貞が生前愛誦していたものであろうか。』(入間市史 p245)

新田義貞の鎌倉攻めに対し、北条氏一門が迎え撃ちますが、その第二軍に副将として丹党の加治二郎左衛門入道の名があり、得宗家の御内人として安保道潭・新開左衛門入道とともに加治家貞が戦陣に加わり亡くなったことがわかります。「元弘三年五月二十二日道峯禅門」と刻まれていることから、鎌倉幕府滅亡の日を記していることとなります。

徳蔵寺の板碑と円照寺の板碑によって、新田側と幕府側に分かれて戦った武士がそれぞれに供養されていることがわかります。

(3) こさ池・おかゆ塚＝新田義貞伝承

太平記の記述、二枚の板碑などで、新田義貞の鎌倉攻めを追ってきましたが、狭山丘陵周辺には、具体的な場所を通じて、関連する“伝承”が多々残されています。

新光寺

所沢市の新光寺は、建久4年(1193)、源頼朝が那須野に行く途中にここで昼食をとり、その時頼

朝は幕舎の地を寺に寄進したという。しかし、その後戦乱でかすめとられてしまった。新田義貞の鎌倉攻めの時ここで戦勝祈願をし、北条氏を敗ってから再び立ち寄り、取り戻した土地を寄進した。

誓詞橋

所沢市北野の砂川に架かる誓詞橋は、新田軍の軍兵が誓をしたところ

白旗塚

所沢市小手指ヶ原にある「白旗塚」は義貞が源氏の白旗をたてたところ

勢揃橋

所沢市久米の柳瀬川に架かる勢揃橋は新田軍が勢揃したところ

將軍塚

狭山丘陵の東端にある八国山の將軍塚は、義貞が旗をたてたところ

兜掛の松

所沢市久米の鳩峯八幡神社にある松は、義貞が兜を掛けたところ

新田義貞願文・誓詞の桜

所沢市山口の金乗院(山口観音)に保管されている寺宝「新田義貞願文」は、義貞が小手指ヶ原合戦に際し、山口観音の前で戦勝を祈願した時に捧げられたもの。

本堂の前にある桜は、その時、義貞が自ら植えたもの

勝陣場・精進場

東村山市諏訪町二丁目 義貞が陣を敷いたところ

おびき山

武蔵村山市・岸に伝わる伝承

『山崎さんにウストラ(少し)つながる話があるだよ。昔、新田義貞が六道山の方からあがってきたときのこど、岸の裏の天王様の上の方をおびき山というだんべ。アニ(なに)、おびき寄セタアジヤナク(寄せたのではなく)、サムレエ(さむらい)が旗をもって尾をひいたからだよう。新田が鎌倉攻めのとき、ここを通っているケンド、ずっと向うに行って、埼玉の小手指から国分寺も通っていっただんべ。分倍河原の合戦で負けてから、国分寺に火をつけたケンド、また押しケエして、進んでいったあよ。サムレエが、旗を連ねたおびき山のこっちに、ごはんたきツノ(というの)があつて、ごはん炊いたのだから。』(武蔵村山市史上 p 585)

こさ池・おかゆ塚

東大和市 宅部・内堀に伝わる伝承 　こさ池とかゆ塚

『今は多摩湖の底になってしまった内堀に、こさ池という池がありました。古歌に残る「狭山の池」とも言われている池で、この辺では最も大きく、水に沈むまで田用水として使われていました。

このこさ池にまつわる伝説があります。

昔、新田義貞が鎌倉を攻めた時、この附近に陣を布(し)き、こさ池の水を汲んで粥をつくって軍勢に食べさせたということです。食べた場所が「かゆ塚」と言っておかゆ塚と云って東村山の廻り田にある金山神社の南に残っていました。その辺には四ツ塚と云って当時の伝説がある塚が最近まで並んでいたそうです。又、こさ池に近い山の上に、「ごはん塚」といわれた所もありました。』(東大和のよもやまばなし p 195)

この他、新田氏の伝承は義貞のみでなく、次の時代の、義興・義宗などについても多く伝えられる。

(4) 逃げる農民、借金を申し込み、兜を借りる武士(高幡不動胎内文書から)

東大和市周辺で、中世に活躍した武蔵武士の実態についてはほとんど資料が伝わりません。日野市に伝わる資料でその実態を紹介します。

日野市高幡不動尊の周辺を治めていた武士に山内経之(やまのうちつねゆき)がいました。山内氏は歴応2年(1339)7月からその年の暮れにかけて、高師冬の命を受けて、茨城県つくば市周辺の小田城、関城、大宝城方面に出陣しました。その戦場から家族に当てた手紙が高幡不動尊の胎内

から発見されています。

手紙の内容は完全には解説されていませんが、大要がわかっています。その一部を紹介します。

領内乱妨(常に領地を侵害される恐れがあった)

十口日、経之書状か、高幡不動堂あるいは関戸観音堂の僧宛か(2)

余りにも諸事が重なって手紙を書くことができませんでした。彦六郎殿が「かくしん」の領内を乱妨したことも、高幡殿・新井殿へ申そうと思いましたが、余りにも面目ないので、三郎殿(青柳か)へ申すことさえ人の道に背くように思い、恥入って言うことができませんでした。

臨時の課役を徴収せよ(戦役ごとに臨時課税をしたらしい。農民は応じなかった気配がある)

月日不明、経之書状、又けさ宛(4)

百姓に天役(臨時の課役)をかけたのに、今日に至るまで無沙汰している由を聞きました。八郎四郎・太郎二郎入道に申し付けて、作物に札をささせなさい。異議申し立てをする者があるならば、こちらに知らせて下さい。

……………あるべき由の文を見せて下さい。そのようにしなければとても安堵はできないと思います。

所領のことは新井殿に任せる(所領の心配)

月日不明(暦応二年)、経之書状か、妻宛か(21)

彦三郎を常陸へ下るまでと思っただけでそちらへ帰っていたのですが、五郎も余りにも帰りたいたい言うので帰します。かねて申しつけておいた下地(所領)のことは新井殿に任せておいて下さい。

兵糧米を送れ(合戦への参加は自費だった)

月日不明(暦応二年)、経之書状か、関戸の観音堂の坊主宛(24)

兵糧米を一、二駄欲しいので、万事お頼み申します。

借金を御願ひする(借金の頼りは僧職だった)

八月か(暦応二年)、経之書状か、関戸観音堂の坊主宛(25)

御文の旨は詳しく承りました。常陸下向も今日、明日と言われているけれどもいつのことかわかりません。大変心苦しいのですが、新井殿から「御秘計」(借用)して下さってなんとか(銭を)送って下さいませんか。十六日に出発とも言われています。

馬を送れ(鞍・具足も借用だった)

十月十六日(暦応二年)「山川より」経之書状、又けさ宛(38)

百姓どもに申しつけて鞍・具足を借り馬に乗せてやって来させて下さい。鞍や具足がないなら徒歩で馬だけを牽かせて来させて下さい。万事母御と相談して、そなたももう幼くないのだからかいがいしく取り計らって下さい。

逃亡した家臣を連れ戻せ①

十月二十八日(暦応二年)、「山川より」経之書状、又けさ宛(39)

合戦といい、留守のことといい心細いことはいいようありません。逃亡した「又ども」(家臣の従者)の人数を書いて送ります。この者どもは一人ももらさず捕らえてこちらへ送り返して下さい。これを違えるならば、親子とも思いません。「越中八郎が又」「やつの又」「紀平次が又」……この者どもがどうしても来ないならば、その親をよこしてもらいたい。大久保の弥三郎やまだ下っていない者どもは暫く後に参るよう申し付けて下さい。

逃亡した家臣を連れ戻せ②

十一月二日(暦応二年)、経之書状、山内又けさ宛(40)

さとう(佐藤か)三郎の童を召す次第です。覚悟して馳せ参るよう「奥」(みちのく、陸奥)へも

申し付けて下さい。

先に申し付けたように逃げ帰った「又めら」(従者)は一人も逃さないで捕らえてよこして下さい。そちらの留守の事、あれこれ思いやると心配です。万事また申します。

馬が欲しい、兜は借りている

十一月(暦応二年)、経之書状か、又けさ宛か(42)

馬も欲しいのです。「くせい」(供勢か。仲間の軍勢のことか)が持っていた馬を「えひ殿」の元へ申して頂戴しました。兜もこの程は人が貸してくれるのをを使ってやがて合戦をするわけです。人々がこれ程討たれたり手負いをしているのに、自分はこれまで手負いもせずに来ていることから、合戦はたいしたものではないと思わないで下さい。

以上は、解読できた部分のさらに一部です。切々たる訴えの背景が当時の厳しい実態を如実に告げています。胎内文書であることから、主人公の経之氏はこの合戦で亡くなったものと考えられます。その供養のため手紙が高幡不動尊の胎内に納められたのでしょう。

V 東大和の中世を解明する一つの手がかり

ほとんど東大和市独自の資料を紹介できませんでした。これが、東大和市の中世を語る現状です。しかし、何らかの手がかりを得たいものです。

1 寺社と丘陵に祀られる板碑

幸い、東大和市と古代から中世にかけて同一地域を構成していたと考えられる東村山市の一部地域(宅部)には、中世に創建された寺院があります。また、狭山丘陵には板碑が祀られていました。これが、手がかりの一つになりそうです。

(1) 円乗院 三光院 正福寺 豊鹿島神社の創建

東大和市と隣接する東村山市の宅部地域の寺社の創建伝承、建築物の創建棟札から、この地域の中世の手がかりを探ります。

円乗院

新編武蔵風土記稿では

『圓乗院除地七畝二十六歩、是も字南分と云ふ所にあり、新義真言宗、豊嶋郡石神井村三寶寺末成り、愛宕山東圓坊と號す、開山は賢誉法印と云、平治元年二月八日寂せり、本堂七間に六間半南向、本尊木の坐像二尺五寸許、又薬師の像八寸許なるを安置す、恵心の作成るよしをいへど、秘してみることをゆるさずと云、・・・』

狭山之葉では

『古時延壽院と云へる寺宇上の屋敷に在りしが、慶長十二未(ひつじ)年八月十八日風禍により坊舎悉(ことごと)く吹き潰されしを、愛宕山へ移し山をあたごと呼ぶに至る。』

とあります。開山・賢誉法印が亡くなったのが平治元(1159)年2月8日とのことから、平安末の1159年以前に、現在の湖畔地域に、最初の寺院が建てられたこととなります。

三光院

新編武蔵風土記稿では

『三光院 境内は御朱印地の内なり、村の北にあり、真義真言宗、同郡青梅村金剛寺の末、輪王山真福寺と号す、開山は圓長と云、天永三壬辰(じんしん)(みずのえたつ= 1112)五月三日寂す、法流開山を寂如と云、享保二十一年丙辰(へいしん)(ひのえたつ= 1736)閏月十一日寂せり、本堂十間に五間東向、本尊彌陀を安す、木の坐像、長一尺、御朱印三石は天正十九年(1591)辛卯(かのとう)十一月〇日御寄付あり、・・・』

狭山之葉では

『宅部山三光院眞福寺は御室御所の直末なりしが、寛永十癸酉(みずのととり)年三月十九日離末して、新義其言宗杣保郷青梅村青梅山金剛寺無量壽院の客末となる。草創開基未詳。開山快元法印は延文二年丁酉六日朔日入寂す。是より十二世圓長法印まで不明なり。本寺書留帳に中興開山法印圓長と記しあり。 現在の三光院 正面本堂 左 観音堂
法流開基は元禄十二年卯十二月十一日法印寂如なり。』

とあります。新編武蔵風土記稿では開山は圓長と云、天永三年(1112)、狭山之葉では開山快元法印は延文二年(1357)、それぞれ入寂とし、湖底に沈んだ宅部に平安末から中世に創建されています。

正福寺地藏堂

正福寺の創建伝承は、『千躰地藏菩薩略縁起』(木版)、『新編武蔵風土記稿』などの記述によれ

ば、鎌倉時代の弘安元年(1278)、南宋径山寺の石溪心月を勧請開山として、執権北条時宗による創建としています。

また、北条時宗がこの地へ鷹狩りに来ていたとき病に倒れ、時宗は夢枕に地蔵菩薩が現れ「貴公の命日数ならずこの丸薬を服用せば、立ちどころに病魔退散す」とのお告げがあり、全快したことから、飛騨の工匠を招き七堂伽藍を造営させたとも伝えられています。



地藏堂(国宝)は解体修理の際に、尾垂木尻持送りに残された応永 14 年(1407)の銘が入った墨書が発見されました。それが修理銘か建立銘か検討されましたが、今日では建立時のものとして定着しています。

豊鹿島神社本殿

豊鹿島神社の創建伝承は『武蔵名勝図会』記載の社伝によれば文武天皇の慶雲四年(707)、武蔵の国へ来た鬼神を常陸峯に鎮めて、天智天皇第四の姫宮及び蘇我山田石川麿が建立したものとされています。

本殿(東京都指定有形文化財)は解体修理の際に発見された棟札では、本殿の創建を文政元年(1466)とします。



◎東大和市の寺院の創建伝承は 1100 年代を示し、国や東京都を代表する建造物の創建は、1400 年代であることを示しています。ここに、鍵がありそうです。

(2) 板碑が告げる中世

中世を語る有力な資料に「板碑」があります。秩父産の緑泥変岩を材料にして、石板状にしたもので「青石塔婆」とも呼ばれます。産地が近かったことと鎌倉街道が通じていたことから、武蔵には多数(約4万基)が建立され、東大和市域には現在100を超すものが発見されています。

石造塔婆

その性格は、板碑、青石塔婆と云われるように、石造の塔婆とされます。故人の追善供養や自らの現世・来世の安楽を願うところから造立されたと考えられています。

種子

多くの板碑には仏尊を示した梵字が彫り込まれています。これを種子と呼んでいますが、地域的な特徴があります。

東大和市の場合	東京都区部
阿弥陀一尊 44 %	66 %
阿弥陀三尊 31 %	24 %
その他 25 %	10 %

東村山市の場合は阿弥陀一尊、阿弥陀三尊、弥陀種子で90%を占め、薬師如来がないことと名号が比較的多いことが特徴としてあげられています。

年号

板碑には年号が記されている場合が多く周辺市の状況は次の通りです。

市名	最古	最新
東大和市	永仁 4 年(1296)	天文 11 年(1542)
武蔵村山市	正応 3 年(1290)	
東村山市	弘安 6 年(1283)	天文 16 年(1547)

造立場所

東大和市の場合は貯水池建設により古村の地域が移転しているため、正確には把握できませんが、武蔵村山市の場合は次のような特徴があるとされます。

『それは、市内の板碑は無原則にどこにでも有るのではなく、特定の場所を中心に集中する傾向を持っているらしいということである。つまり、狭山丘陵南麓にはいくつもの小さな谷が並んでいるが、板碑の多くはこの谷の奥および入り口付近を中心に広がっているのである。これは、前述のような平安末期から鎌倉期にかけての谷を単位とした開発行為を始めとする諸活動のあり方と、板碑の分布が無縁でないことを示しているのではないか。とするならば、これらの谷を中心に営まれた中世人の活動は、板碑の造立年代が示す一四世紀さらには一五世紀に引き継がれていると考えられよう。その中で興味深いのは、三ツ木地区峰の谷および中藤地区赤堀の谷における板碑の分布状況である。

この二つの谷の周辺から出土している板碑を見ると、いずれも谷の奥に所在する板碑の方が谷を出た平地部分に所在する板碑よりもいささか古い傾向を持っているのである。

具体的に見ると、峰の谷では谷奥に徳治二年(一三〇七)・文保年間(一三一七～一三一九)・感応



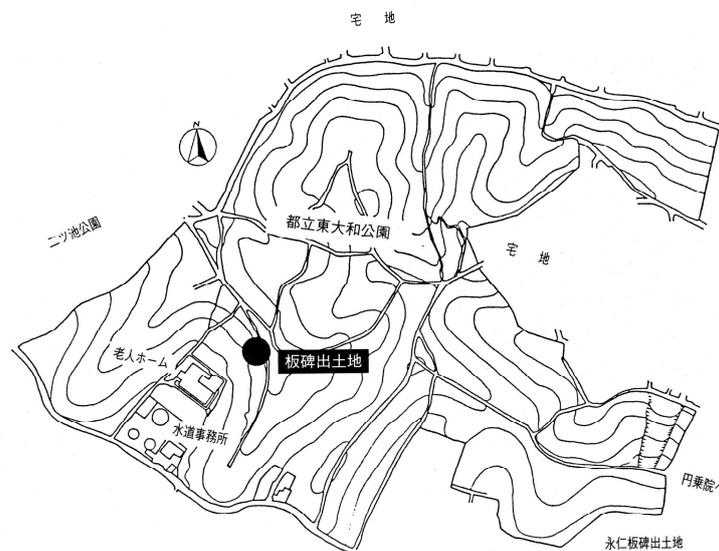
東大和市最古の板碑

元年(一三五〇)・貞治二年(一三六三)の銘を持つ板碑が所在するのに対し、谷を出た平地部の板碑は応安二年(一三六九)・永徳三年(一三八三)銘のものである(徳治二年銘板碑の所在地は『村山町史』第五二図による)。明らかに谷中の板碑の方が古いのである(もっとも、谷奥には長祿四年[一四六〇]・応仁三年(一四六八)銘の板碑もあり、この谷の中が一五世紀に至るまで使われていたことは確かである)。一方の赤堀の谷では、谷奥に嘉元二年(一三〇四)・暦応二年(一三三九)・貞治二年(一三六三)銘の板碑があり、谷を出た平地部の板碑は貞治五年(一三六六)・康暦元年(一三七九)・至徳二年(一三八五)銘のものが古い方で、一五世紀第四四半期までの年号を持つ板碑が所在している(但し、ここでも谷奥に一五世紀第四四半期の年号を持つ板碑があり、前述した峰の谷と同様の傾向を示す)。

この二つの谷をめぐる板碑のあり方から、鎌倉時代に造立された板碑は谷の奥に、室町時代の板碑は谷の外にという傾向を見いだすことができるだろう。それは、先に推測したように、鎌倉時代にまず狭山丘陵南麓の小さな谷が開発拠点として切り開かれていったことを反映していると考えられる(この開発時期は平安時代末期まで遡る可能性を秘めている)。その開発主体者の拠点のあり方の一つとして、宇津木台タイプの境堀を持った屋敷地が構えられたのであろう。そして、この谷の中を拠点として活動した人びとは、室町時代に入ると谷を出た場所にも活発な活動痕跡を残すようになるのである。』(武蔵村山市史上 p 291)

東大和市の最古の板碑

東大和市の最古の板碑は永仁4年(1296)のものですが、実は、弘安六年(1283)三月銘板碑が現在の貯水池事務所の近くにあった五十嵐墓地に存在していたことが伝えられます(五十嵐民平考で自転車で持ち去られた事が記されている)。この板碑が存在していれば、東大和市最古になり、永仁4年板碑とあわせて出土場所を考えると、貴重な示唆が得られます。



東大和市最古の板碑の出土地 (東大和市郷土博物館原図)

かつての水道事務所の北東から発見されました。(東大和市史資料編 6 p 88)

東大和市中で祀られた板碑の最盛期

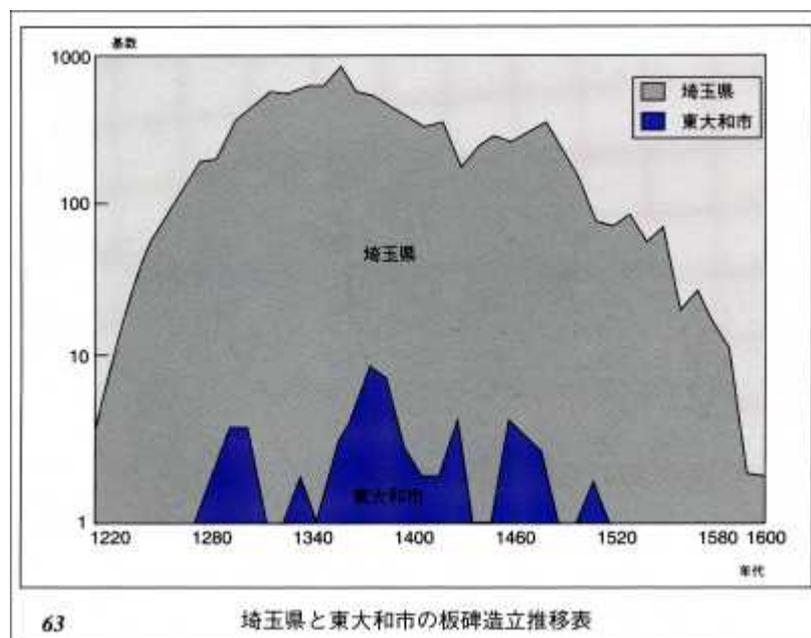
板碑は祀られた時期に一定の推移が見られます。東大和市の特徴を東大和市史資料編では次のように説明しています。

『周辺地域の板碑の造立推移には二度の画期が認められる。当市においても同様の造立推移が認められる。

第一の画期は、十四世紀中葉の一三六〇年代前後に盛行期を迎えるが、当市の場合、二、三〇年前後の年代の開きがあり若干遅れるようである。

また、第二の画期は、他の地域では、おおよそ一四八〇年前後にあるが、当市の場合は、周辺より若干早い時期の一四六〇年代が第二の盛行期といえ造立数が一時的に増す傾向にある。

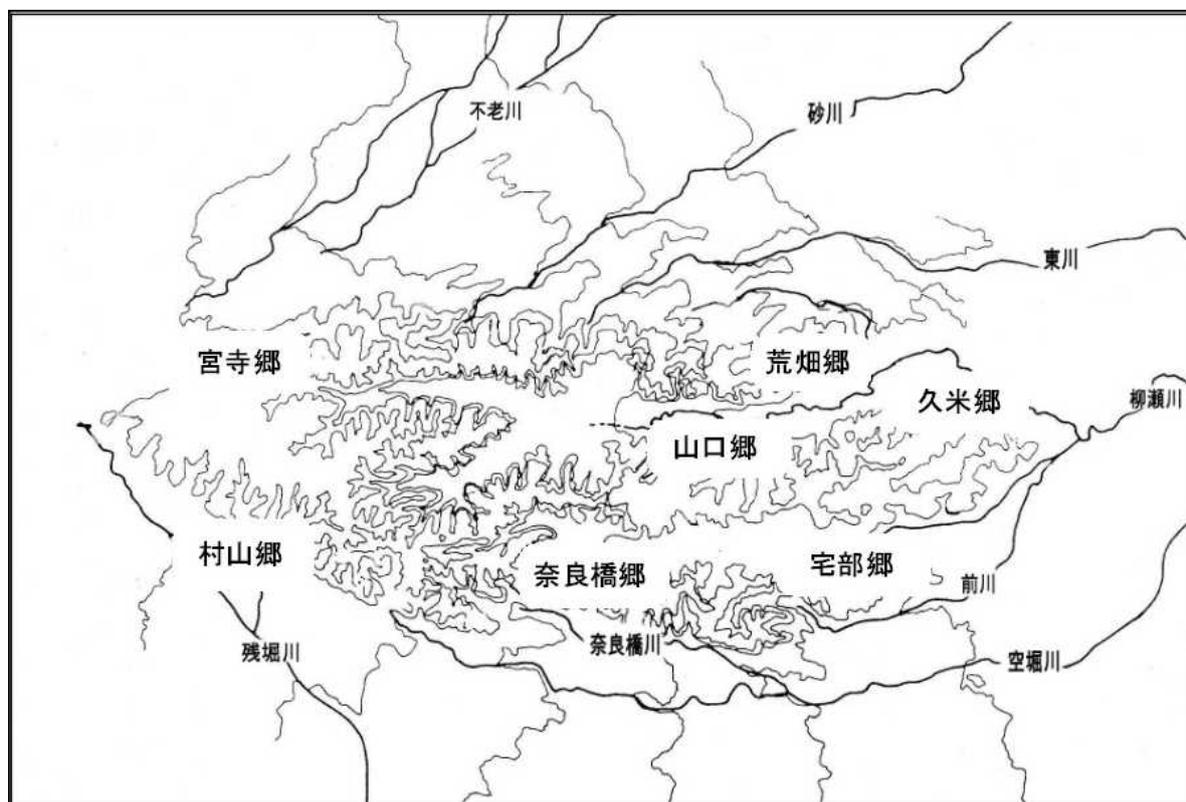
そして、現段階では、一五二〇年代には板碑の造立が終わり、近世墓標へと変遷してきたと思われる。』



東大和市史資料編 6 p63

東大和市で板碑の造立が最も盛んに行われたのは 1400 年代であることがわかります。この頃、東大和市では、村の構成など一つの画期があったのではないかと推定されます。

2 中世の郷と上総入道 (かずさにゅうどう)



中世の地域区分に「郷」がありました。残念ながら、東大和市周辺では、その位置も区域も範囲も未確定です。しかし、そこに「上総入道」を名乗る有力者の存在が浮かんでいます。これらの研究から何らかの手がかりが得られそうです。

(1) 中世の郷(村山郷・奈良橋郷・宅部郷)

これまで、一般的に狭山丘陵周辺に存在すると考えられていた中世の郷は図の通りでした。特に、丘陵南麓では村山郷と宅部郷が表面に出て、奈良橋郷は一部の知られる程度でした。この講座では次のように考えたいと思います。

村山郷

武蔵村山市と瑞穂町の一帯は併せて村山郷と呼ばれていました。村山土佐守が存在したこともあり阿豆佐味天神社や福正寺にその記録が残されています。しかし、村山党初期からの郷であったかどうかは不明です。

宅部郷

①東大和市域内の村山貯水池の湖底に沈んだ「内堀」周辺を「上宅部」と呼び、江戸時代には「宅部村」が存在しました。
②東村山市にある正福寺は、昭和9年の解体修理の際に発見された尾垂木尻持送りに残された墨書銘に、「武州宅部郷金剛山正福寺」と記されています。また、周辺を「下宅部」と呼びます。以上から「宅部郷」は上宅部と下宅部を含む広範な郷で、東大和市の一部と東村山市の一部で構成されていたと考えます。

奈良橋郷

- ①豊鹿島神社本殿棟札に「上奈良橋郷」と記されています。
- ②狭山之葉では芋窪村から高木村までを「奈良橋郷」としています。これは江戸時代まで慣例的に奈良橋郷が使われてきたものの反映ではないかと思われます。
- ③豊鹿島神社本殿棟札の「上奈良橋郷」は奈良橋郷を上・下に区分する表記と解します。以上から、芋窪から高木までを奈良橋郷と考えます。

(2) 上総入道

東大和市の中世を再現する上で示唆に富む資料が揃ってきました。4つの点から整理します。

①豊鹿島神社本殿棟札

平成4年の解体工事の際に明確にされた棟札は次のことを明らかにしています。

武州多東郡上奈良橋郷

創建年代 文正元(1466)年

大檀那 源朝臣憲光 当別当 梅満命姉 大工 二郎 三郎 近吉

武州多東郡上奈良橋郷

修理 天文19(1550)年

大檀那 工藤下総入道 当別当 梅満命姉 大工 乙者た太郎左エ門

◎豊鹿島神社には建武3年(1336)の銘がある大鐘が奉納されていたとの記録があります。その頃からの積み重ねが、1400年代になって、東京都の有形文化財に指定されるような立派な豊鹿島神社本殿を創建したことが考えられます。また、一挙に増加する板碑群との関連も考えられそうです。創建時の大檀那・源朝臣憲光という人物については手がかりを得ていません。

②正福寺地蔵堂尾垂木尻持送りに残された墨書銘

国宝に指定されている正福寺地蔵堂は昭和9年の解体修理の際に発見された尾垂木尻持送りに残された墨書銘によって、「応永14年(1407)」の創建、寺名「武州宅部郷金剛山正福寺」とわかります。これによって正福寺のある位置は「宅部郷」であったことがはっきりします。創建に係わる檀那は不明確です。

③立河氏文書

古文書の一つに、1417(応永24)年1月20日、「関東管領上杉憲基施行状写」があります。この文書の内容は「立河駿河入道」が庶子「立河雅楽助」に「土渕郷田畠・在家・河原等」を「還補」するにあたっては、「宅部下総入道」の立ち会いのもとに行え、とするものです。

立川市にある普濟寺の場所は「立河駿河入道」の館であろうと考えられています。この駿河入道が、多分息子であろう雅楽助に、日野市内にある＝多摩川を越した部分の田畠・在家・河原等を返還することになった。については、宅部下総入道が立ち会って、実務を行え。という関東管領の命令書と考えられます。

ここから、立河氏と同等の武士が宅部に存在したことが伺えます。1400年代に一挙に板碑の造立が増加することを考え合わせると、宅部地域に、それらを包含した相当の力を持った有力者が存在したことが指摘できそうです。

④「普濟寺版」刊経の刻記

中世になると仏教経典が木版摺りで出版されるようになり、貞治2年(1363)から応永7年(1400)にかけて、立川普濟寺で刊行されました。そのお経の行間に、助縁者(経典の刊行にあたって喜捨をした人々の名や地名)が刷り込まれていて、極めて貴重な資料となっています。

その応安元年(1368)刊日蔵経巻八に「宅部美作入道貞阿」と「高木二郎左衛門入道」が助縁者としての記されています。

③宅部下総入道、④は宅部美作入道貞阿で、名前も時代(50年ほど)も違います。しかし、宅部を名乗っているところから、関係者ではないかと考えられています。

①の工藤下総入道はさらに100年後になります。この全てを関連づけるのは短絡でしょうが、工藤下総入道の奈良橋郷と宅部下総入道の宅部郷を近隣としてとらえると、何らかの関連があったことも考えられます。